
令和5年度

東京家政大学 女性未来研究所

活動報告書

Tokyo Kasei University

Institute for the Advancement of Women

Annual Activity Report

令和5年度

東京家政大学 女性未来研究所

活動報告書

Tokyo Kasei University

Institute for the Advancement of Women

Annual Activity Report

はじめに

2014年4月に設立された女性未来研究所は、この2024年4月に10周年を迎えます。この間、研究所の研究や活動にかかわってくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

設立以来、建学の精神である「自主自律」、生活信条である「愛情・勤勉・聡明」と長年にわたる女子教育の伝統に基づき、本学固有の女性研究を行うとともに、その成果を社会に広く公表し還元することで、多様性を尊重する共生社会の実現と男女共同参画社会における女性の活躍を支援することを目的としております。その目的に資するためにさまざまな研究や活動をしてまいりましたが、2023年度から学内の研究費の配分方法が変更となり、研究所独自の研究プロジェクトを行うことが大変難しくなりました。今年度の活動報告書には研究プロジェクトの実施報告をすることができず、研究所としての活動報告のみの掲載となりました。

そのような中でも、今年度は、講師の先生にご協力をいただき、「環境とジェンダー」、「性の多様性」といった、今までほとんど取り上げることのなかったテーマを取り上げた講演会の実施にチャレンジし、参加者の皆様からは、好評をいただいております。

当研究所は、今を生きる女性たち・これからの社会をつくる女性たちを含め、あらゆる人を支えるために、意義ある研究・活動をする使命を有しています。その使命に応えるべく、これからも少しずつでも歩みを進める所存です。学内外のご関係の皆様には、引き続き、ご指導・ご協力を賜りたく存じます。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2024年3月31日

女性未来研究所副所長

平野 順子

CONTENTS

令和5年度

東京家政大学 女性未来研究所

活動報告書

はじめに 平野 順子	3
------------------	---

Chapter 1

女性未来研究所

1-1 令和5年度 女性未来研究所	5
1-2 令和5年度 女性未来研究所 活動記録	5

Chapter 2

共催事業

東京家政大学女性未来研究所・板橋区

女性の活躍推進に向けた共催事業

「子育てママの未来計画」	10
--------------------	----

平野順子／並木有希

Chapter 3

講演会

3-1 東京家政大学ヒューマンライフ支援機構女性未来研究所主催講演会 ジェンダー平等の実現のために ～環境に優しい持続可能な社会と私たちの役割～	16
女性未来研究所	

3-2 東京家政大学ヒューマンライフ支援機構女性未来研究所主催 ハイブリッド講演会 「わたしの生き方 わたしたちの未来」	25
女性未来研究所	

3-3 東京家政大学ヒューマンライフ支援機構女性未来研究所主催 学修・教育開発委員会共催FD・SD講演会 「LGBTQ+（性的マイノリティ）を学ぶ」	35
女性未来研究所	

Chapter 1

女性未来研究所

1-1 令和5年度 女性未来研究所

1-2 令和5年度 女性未来研究所 活動記録

1

令和5年度 女性未来研究所

副所長(所長事務代理)

平野 順子 保育科准教授

名誉所長

樋口 恵子 東京家政大学名誉教授

オブザーバー

木元 幸一 理事

岩井 絹江 理事

広報・宣伝部部长

令和5年度 女性未来研究所 活動記録

6月15日(日)	女性未来研究所主催ハイブリッド講演会 「ジェンダー平等の実現のために ～環境に優しい持続可能な社会と私たちの役割～」	女性未来研究所
7月5日(日)	東京家政大学・板橋区 女性の活躍推進に向けた共催事業 「子育てママの未来計画 レジリエンス編①」	板橋区男女社会参画課 平野 順子 並木 有希
7月12日(日)	東京家政大学・板橋区 女性の活躍推進に向けた共催事業 「子育てママの未来計画 レジリエンス編②」	板橋区男女社会参画課 平野 順子 並木 有希
7月22日(日)	東京家政大学・板橋区 女性の活躍推進に向けた共催事業 「子育てママの未来計画 家政学入門編①」	板橋区男女社会参画課 平野 順子 並木 有希
7月28日(日)	東京家政大学ヒューマンライフ支援機構プロジェクト研究企画 (女性未来研究所後援) 「子育てママの未来計画 ストレスケア編」	平野 真理
7月29日(日)	東京家政大学・板橋区 女性の活躍推進に向けた共催事業 「子育てママの未来計画 家政学入門編②」	板橋区男女社会参画課 平野 順子 並木 有希
8月21日(日) ～10月13日(日)	板橋区 大学との連携 (板橋区役所内にてギャラリーモールにて展示・区のホームページ掲載)	
9月2日(日)	「子育てママの未来計画 ライフデザイン編①」 (東京家政大学ヒューマンライフ支援機構プロジェクト研究助成費にて実施)	並木 有希
9月8日(日)	令和5年度板橋グリーンカレッジ(専門課程) 「身の回りにおけるジェンダー問題について考えよう」	平野 順子
9月16日(日)	「子育てママの未来計画 ライフデザイン編②」 (東京家政大学ヒューマンライフ支援機構プロジェクト研究助成費にて実施)	並木 有希

9月19日(四)	連合東京三多摩地域三多摩ブロック地域協議会主催セミナー講演会 「もはや昭和ではない！ 性役割にとらわれず、皆が個性を発揮するために」	平野 順子
9月22日(金)	令和5年度板橋グリーンカレッジ(専門課程) 「老若男女、多様な人々を理解しよう」	平野 順子
10月6日(金)	令和5年度板橋グリーンカレッジ(専門課程) 「自分の常識を疑ってみよう～立場が違えば常識も違う～」	平野 順子
10月13日(金)	令和5年度板橋グリーンカレッジ(専門課程) 「令和時代の多様性社会のために～もはや昭和ではないこれからのジェンダー観～」	平野 順子
10月21日(土)	生活科学研究所主催 緑苑祭企画 第40回レクチャーフォーラム 「最高の睡眠は腸活で手に入れる～健康長寿100歳をめざして～」 (協力:ヒューマンライフ支援センター・女性未来研究所)	生活科学研究所 ヒューマンライフ支援センター 女性未来研究所
10月25日(日) ～3月6日(日)	国分寺市本多公民館主催 幼い子のいる親のための教室 「考えてみよう 子どものこと 自分のこと」	平野 順子 井上 貴広
11月9日(日)	女性未来研究所主催ハイブリッド講演会 「わたしの生き方 わたしたちの未来」	女性未来研究所
	独立行政法人国立女性教育会館女性アーカイブセンター所蔵 「28歳の働く私」パネル展示 (当研究所制作版を含む)	女性未来研究所 独立行政法人国立女性教育会館 女性アーカイブセンター
11月11日(日)	令和5年度東京ウィメンズプラザフォーラム内 NPO 法人子育てママ応援塾ほっこり～のプレゼンツ 「子育て中の女性が、より自分らしく活躍できる世の中のために」	内海 千津子 平野 順子
11月15日(日)	令和5年度板橋グリーンカレッジ(教養課程) 「ジェンダーって何? ～家庭・職場・地域でのモヤモヤの正体～」	平野 順子
11月25日(日)	緑窓会主催・女性未来研究所協賛 講演会「貴女のキャリア人生の夢を叶えるために」	緑窓会 女性未来研究所
12月25日(日)	第1回 女性未来研究所運営委員会	
2月16日(金)	東京家政大学ヒューマンライフ支援機構プロジェクト研究企画 (女性未来研究所後援) 「リラックス 瓶コラージュ by 子育てママの未来計画」	平野 真理
2月22日(日)	女性未来研究所主催 FD・SD 講演会(学修・教育開発委員会共催) 「LGBTQ+ (性的マイノリティ) を学ぶ」	女性未来研究所 学修・教育開発委員会
3月4日(日) ～3月8日(金)	東京家政大学リサーチウィークスポスターセッション 参加	女性未来研究所
3月9日(日)	東京家政大学ヒューマンライフ支援機構プロジェクト研究企画 (女性未来研究所後援) 「育休後カフェ® オンライン by 子育てママの未来計画」	平野 順子

Chapter 2

共催事業

東京家政大学女性未来研究所・板橋区
女性の活躍推進に向けた共催事業
「子育てママの未来計画」

2

東京家政大学女性未来研究所・板橋区 女性の活躍推進に向けた共催事業 「子育てママの未来計画」

昨年度に引き続き、オンラインにて講座開催を行った令和5年度の実施状況について報告する。

1. 日時

【レジリエンス編】

①令和5年7月5日(水)、②12日(水)

【家政学入門編】

①令和5年7月22日(土)、②29日(土)

午前10時から午前11時30分まで4回連続講座

2. 実施方法

オンライン会議システム (Zoom ミーティングを使用)
ホワイトボードアプリケーション (Miro)

3. 参加人数・内訳

【レジリエンス編】

①21名、②18名

【家政学入門編】

①10名、②9名

4. 内容

講師：東京家政大学ヒューマンライフ支援機構

女性未来研究所
平野 順子 副所長

東京家政大学人文学部
英語コミュニケーション学科
並木 有希 准教授

【レジリエンス編】(二回連続講座)

忙しく家事や育児に追われる毎日で少し疲れてしまった女性が、一休みして自分のことを見つめなおし、こころの元気「レジリエンス」を取り戻す方法を学び、自分の自信を取り戻すためのワークショップを2日間で実施した。

【家政学入門編】(二回連続講座)

家政学の考え方をを使い、自分の生活を見直し、自分の持っている「資源」を整理することで、いきいきと生活を回す方法を考えるワークショップを2日間で実施した。

5. 実施報告と今後の方向性

昨年度より板橋区との共催として実施となった本事業は、通算で7年目を迎えた。関係者と参加者の皆様にご感謝申し上げる。

コロナ禍により、対面開催からオンライン開催となり4年目となるが、受講のしやすさからオンライン開催の希望が多く、引き続きオンラインにて実施している。そのため、参加者は育休中の女性が多いとは言え、すでに仕事復帰の方が半休を取得したり、リモートワークの合間に参加したりと、受講者は仕事をもち続けていることが前提となりつつある。母親・妻というケア役割と社会人・個人としての二重役割を担う女性の増加が見られるため、講座内容もそれに合わせたものにしていきたい。

2023年度
東京家政大学・板橋区
女性の活躍推進に向けた共催事業

子育てママの 未来計画

MAMA SEMI

子どもや家族と関わり、自分を大切にしていますか？
出産育児という大きな変化を機として、
自分自身を再発見するためのテーマとして、
ポイントがわかるワークショップです。
私たちそれぞれが課題(未来)を、一緒に考えたいませんか？

受講料無料

4日連続講座

レジリエンス編	家政学入門編	講師
7/5(水) 7/12(水)	7/22(土) 7/29(土)	東京家政大学 女性未来研究所 平野 順子 准教授 Junko Hirano 女性未来研究所 所長、経営学大学院准教授 並木 有希 准教授 Aki Namiwa 人文学部 英語コミュニケーション学科
10:00~11:30	10:00~11:30	●本講座は子育て支援を推進しています。 ●2021~2023年度連続「子育てママの未来計画」を開催し、子育てママの活躍を支援しています。

お申し込み・お問い合わせ先

オンライン開催について

必要事項

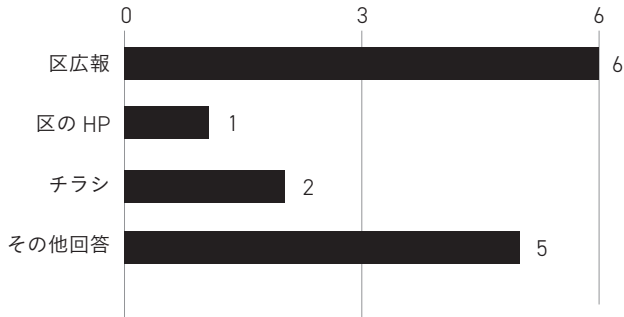
2023年5月29日(月)~6月23日(金)
j-danjo@city.itabashi.tokyo.jp

板橋区役所 男女社会参事課男女平等推進係
TEL: 03-3391-2366
E-mail: j-danjo@city.itabashi.tokyo.jp
(月~金 9:00~17:00/土・日・祭 休)

東京家政大学
女性未来研究所
mamasemi
https://mamasemi.jp

板橋区

Q1. 「子育てママの未来計画」を知ったきっかけを教えてください。(複数回答可)



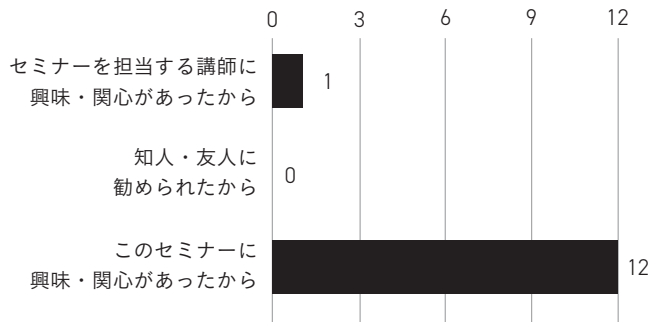
その他回答

母子モアプリ (子育てアプリ)	3
男女社会参画課の方から教えていただいた	1
板橋タイムズ	1

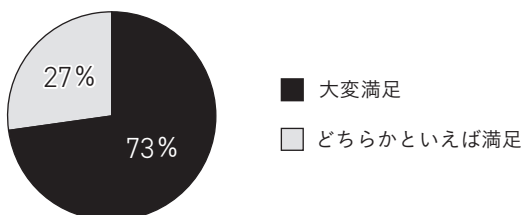
上記でチラシと答えた方にお聞きします。
どこでチラシをもらいましたか？

- 出張所で見つけた気がします。
- 東京家政大学わかくさでもらった。

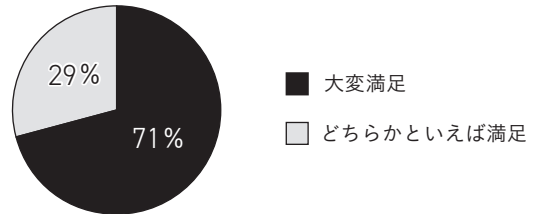
Q2. 「セミナー」に参加したきっかけは何ですか？(複数回答可)



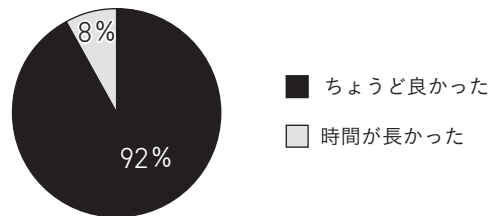
Q3. ご参加いただきましたオンラインセミナーの満足度を教えてください。《レジリエンス編》



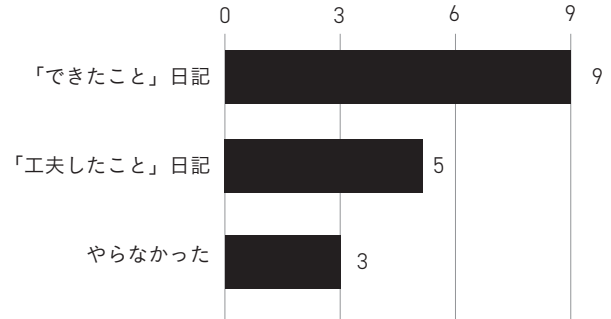
Q4. ご参加いただきましたオンラインセミナーの満足度を教えてください。《家政学入門編》



Q5. セミナーの時間はいかがでしたか？



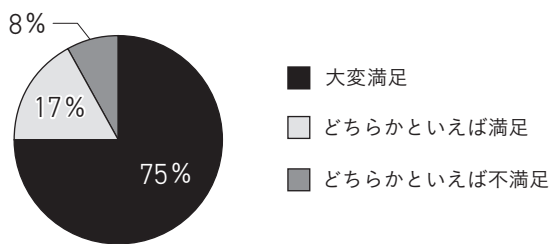
Q6. 宿題をやってみましたか？(複数選択可)



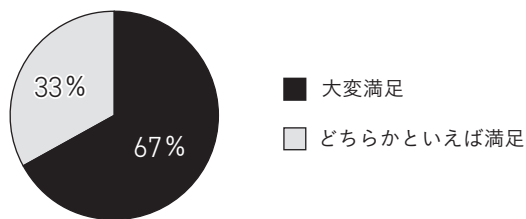
「Q6」の回答を選んだ理由を教えてください。

- ・完全に忘れてしていました。
- ・余裕がなかった。
- ・自分の振り返りをして、自分の頑張りを形に残しておきたかった。
- ・自分のことを振り返ろうと思ったから。
- ・セミナーを時折思い出せるように。
- ・出来たことは振り返る事で可能なので、やりやすかった。
- ・自分を見つめ直す時間が必要だと思ったから。
- ・やるように言われたから。
- ・考える良い機会だと思ったから。

Q7. オンラインセミナーで Zoom を使用してのご感想を教えてください。



Q8. オンラインセミナーで Miro (ホワイトボードアプリ) を使用してのご感想を教えてください。



Zoom・Miro を使用してのご感想をご記入ください。

- ・カメラやマイク使用となるとハードルが上がりますが、匿名で自分の感想や意見を出せて便利です、皆さんのリアルタイムの意見も聞けて楽しかったです。
- ・スマホで簡単に参加できてよかったです。(Zoom)
- ・どちらかという対面での参加が良かった。
- ・いつも使っているツールなので、特に問題なかった。
- ・Miro はやや操作がしづらいなときがありました。
- ・Miro は初めて使用しましたが、わかりやすく、今後仕事でも活用できそうだなと感じました。
- ・Miro は初めてだったので不慣れでしたが、いろいろな機能があって楽しかったです。
- ・Miro は初めて使ったツールでしたが、直感的で操作しやすかったです。
- ・講師の顔を間近で見ることができて親近感が湧きました。匿名で自由にコメントすることができて楽しかったです。複数の人が自分のペースで同時にコメントできるので発言しやすく、画面上に文字として残るので他の人のコメントを把握しやすかったです。講師の方が意見にコメントして下さって、スタンプをつけてくださるのも嬉しかったです。Zoom を起動したときに、名前をニックネームにしなければならないことは分かっていたのですが、誤って本名を表示させてしまったので、事前にもう少し詳しい操作方法の説明がついていたらありがたかったと思います。
- ・Miro は初めて使用したが迷うことなく使えた。Zoom から画面切り替えずに使用できると良いと思った。

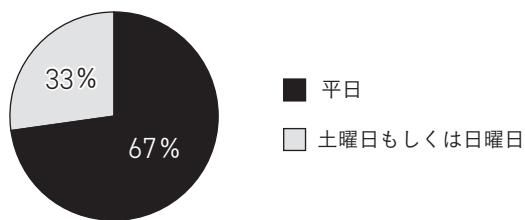
Q9. セミナーを受講する前と後で、変化したことはありますか？

- ・子どもを産んでから自分について考える時間はなかったのですが、定期的に自分を振り返る時間を作りたいと思いました。
- ・頑張りすぎないことが1番、自分の体と心のためだと思いました。
- ・自分の時間を持つことの大切さを認識した。日常の中の小さな成功を自分で評価することの大切さ。
- ・自分を認めてあげる気持ちが高まった。
- ・自分の時間を持つことの罪悪感が減りました。
- ・ほんの少しだけ、母としての肩の力が抜けました。
- ・自分も、もっといろいろな資源をつかって、子育てしようとおもえた。
- ・子育てに前向きになれました。
- ・もっと人に頼って、自分の好きを大切にしようと思いました。
- ・受講前は子育てのことで頭が一杯になっていたが、受講後は自分の未来について考えるようになった。

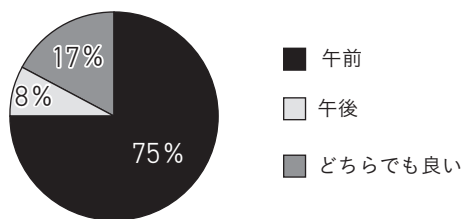
Q10. セミナーに参加してのご感想やご意見をご記入ください。

- ・とても参考になりました。自分を見直したり、育児で大変な中でも今しかない子どもの可愛さをしっかりと感じていきたいと思いました。
- ・大学の教授とセミナーと思うと、堅苦しいものをイメージしていましたが、実際はとても気さくで人の気持ちに寄り添える素敵な講師でした。
- ・講師の方のお話にとっても共感できた。講師が二人いたので、一方通行の講義ではなく聞きやすかった。
- ・先生お二人のお話を聞きながら、参加しているのが心地良かった。コメントを拾ってもらえると嬉しかった。
- ・ママとして息子や家族を優先するだけではなく、自分のことも大切にしようと思いました。
- ・並木先生の価値観が自分と似ていて、母だから無理に頑張る必要はない、といった平野先生とのやりとりに「うんうん」と頷きながら、心が救われました。
- ・講師の方々のかけ合いみたいな進行が、温かく楽しくて良かったです。参加した事で、今の自分の状態や位置を振り返る事が出来たように思います。
- ・初めて育児をする方々は、不安も多いため、このようなセミナーの場があることは大変ありがたいなと思いました。
- ・久しぶりに人に自分の言葉を伝えることができて楽しかったです。内容も気分が明るくなるもので、ためになりました。また参加したいです。
- ・出産してから自分のことは後回しだったので、自分の未来について考えることができて良かった。がっつり講義という感じではなかったので、子どもの世話をしながらでも十分ついていけた。

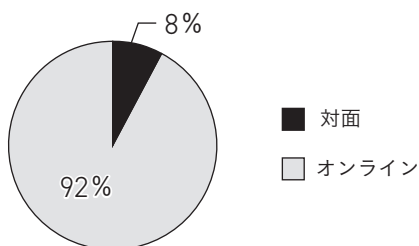
Q11-①. セミナーに参加するとしたら、平日、土日のどちらを希望しますか？



Q11-②. セミナーに参加するとしたら、午前もしくは午後どちらを希望しますか？



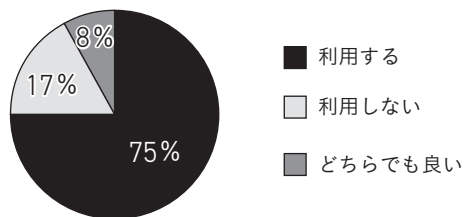
Q11-③. セミナーに参加するとしたら、対面とオンラインどちらを希望しますか？



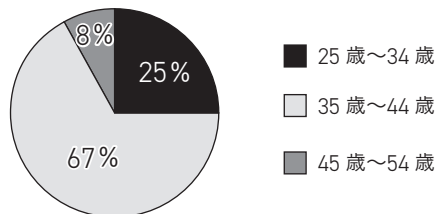
「Q11-③.」の回答を選んだ理由を教えてください。また「対面」と回答された方で希望の会場がありましたらご記入ください。

- ・子どもがいると遠出が大変だから。
- ・在宅で受けられるのは、参加のハードルが下がってよかったです。
- ・参加者の顔が分かるから。より意見を交換しやすい。
- ・自宅から参加できるのは、体力的にも物理的にも非常に助かります！
- ・緊張せず参加出来る。家事育児の時間が確保できる。
- ・子どもが小さいため、預け先がないと受講が難しいです。
- ・今回のセミナーがオンラインで、気軽に参加できるオンラインの良さを感じたから。
- ・移動時間を考えなくて良いから。

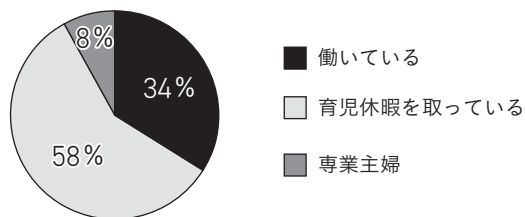
Q11-④. セミナーに託児がありましたら、利用されますか？



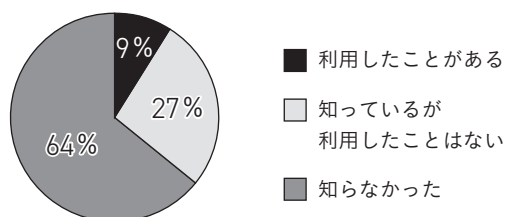
Q11-⑤. 年齢を教えてください。



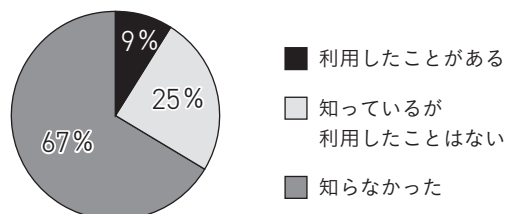
Q11-⑥. 現在、お仕事はされていますか？



Q12-①. 男女平等推進センター「スクエア・I (あい)」情報コーナー（グリーンホール7階）を知っていますか？



Q12-②. 「男女平等推進センター相談室」を知っていますか？



Chapter 3

講演会

- 3-1 東京家政大学ヒューマンライフ支援機構女性未来研究所主催講演会
ジェンダー平等の実現のために
～環境に優しい持続可能な社会と私たちの役割～
- 3-2 東京家政大学ヒューマンライフ支援機構女性未来研究所主催
ハイブリッド講演会
「わたしの生き方 わたしたちの未来」
- 3-3 東京家政大学ヒューマンライフ支援機構女性未来研究所主催
学修・教育開発委員会共催FD・SD講演会
「LGBTQ+（性的マイノリティ）を学ぶ」

東京家政大学ヒューマンライフ支援機構女性未来研究所主催講演会 ジェンダー平等の実現のために ～環境に優しい持続可能な社会と私たちの役割～

ジェンダー視点から見る環境問題全般について、持続可能でより豊かな社会に繋げるために、私たちの役割や身近なところから出来ることについて、環境社会学、ジェンダー研究が専門の萩原なつ子氏（独立行政法人国立女性教育会館理事長）による講演が行われました。



東京家政大学ヒューマンライフ支援機構 女性未来研究所主催講演会

ジェンダー平等の実現のために

～環境に優しい持続可能な社会と私たちの役割～

「あなたはどんな未来をえがきますか？」

2030年までに達成すべき持続可能な開発のための17の目標、SDGs (Sustainable Development Goals)、環境問題解決も含めた持続可能な開発のためには、女性/ジェンダーの視点は欠かせないことを知っていますか？

ジェンダー視点から見る環境問題全般について、持続可能でより豊かな社会に繋げるために、私たちが身近なところから出来ること、役割について考えてみましょう。

講師は、環境社会学、ジェンダー研究が専門の萩原なつ子氏をお迎えします。

日時

2023.6.15 (Thu)

15:30 - 17:00

講演会の流れ

開会挨拶
萩原なつ子氏講演
質疑応答

対面参加

学内関係者のみ
三木ホール（小講堂）

オンライン参加

学外者のみ対象（ZOOMウェビナー）
定員300名

お申し込み
フォームはこちら

※QRコードの画像は
紙デンソーウェブ
の登録画像です。

講師

萩原 なつ子氏

独立行政法人
国立女性教育会館
理事長

独立行政法人国立女性教育会館理事長、認定特定非営利活動法人日本NPOセンター代表理事、立教大学名誉教授。専門の環境社会学、ジェンダー研究、非営利組織論を活かし、地域活動支援や、政策提言を行っている。

対象者
本学大学生・
短大生・教職員
学外の参加希望者

K 東京家政大学
TOKYO KASEI UNIVERSITY

東京家政大学
女性未来研究所
THE RESEARCH CENTER FOR WOMEN'S FUTURE

〒158 東京家政大学ヒューマンライフ支援機構 女性未来研究所
お問い合わせ E-mail : jousei-mirai@tokyo-kasei.ac.jp

環境問題とジェンダー

「みなさん、こんにちは」

講師を務める萩原氏の元気な挨拶から講演会は始まりました。自身の専門分野や（独）国立女性教育会館（NWEC）についてだけでなく、講演資料を当日の朝まで作成していた裏話を交えながら自己紹介をしました。高度経済成長期に生まれ育った萩原氏は高校生の時に読んだ本をきっかけに「環境問題」にどっぷりとはまり、同年の胎児性水俣病患者がいることを知り、公害・環境と女性のつながりに興味をもち、その後の研究テーマにもつながりました。そして、「子どもとエコロジー」をテーマに修士論文を執筆したのは『未来世代に対する責任』からでした。「環境問題」に興味を持った10代の時から何も変わらない現状に、萩原氏は参加者たちに向かって「申し訳ない、一緒に考えていきましょう」と語りました。

多様性を認める社会の実現

「ジェンダー」とは社会・文化の中で後付けされた性別で、身体的な性（SEX）のように固定的なものではありません。しかし、社会・文化的背景の一部で地位、権利、役割などの格差が存在しています。また、誰もが潜在的に「バイアス（偏見）＝先入観」を持っています。



その一例として、萩原氏は近年話題となったニュースを取り上げながら、意図的ではない無意識の差別的言動（マイクロ・アグレッション）について説明しました。

これからは先入観を無くし、ひとりひとりの人権が尊重され、自分が持っている力を最大限に発揮する機会が平等に与えられるには『多様性』を認める社会の実現が不可欠です。

身近な環境問題と「小さな政策決定」

身近なものに自然破壊や環境汚染につながる環境問題が含まれていることを、チョコレートやダイヤモンド、おむつなどを取り上げながら、参加者たちに問いかけました。萩原氏による環境問題に関する替え歌の披露（美声）を挟みつつ、私たちの「小さな政策決定」が結果として生産者を変えることもあれば、生産者の意識が消費者を変えていくこともできます。環境に優しいものを選択していくことが『持続可能な社会』を作っていきます。

ジェンダー主流化と SDGs

1991年に開催されたマイアミ会議は、持続可能な開発におけるジェンダー主流化のターニングポイントとなりました。その採択文書はSDGsまで繋がり、前文に「ジェンダー平等の実現」が明記されています。しかし、現



在のペースでは更に40年はかかります。日本のSDGs達成ランキングは世界19位（2022年時点）とジェンダー平等の課題は多く残っています。「平和で人類と地球のよりよい関係」について萩原氏は「SDGsの目標にもある『ひとりひとりの政策決定』、私たちがどのような選択をするのが『平和な社会』に繋がります。」と語り、講演を終えると会場からは惜しめない拍手が送られました。

皆さんがハチドリになってほしい

質疑応答の際に萩原氏は『ハチドリのひとしずく』の物語を紹介されました。「環境とジェンダーに関する問題は、とても広くて多様。何か違和感に思った時こそ、その『違和感』を突き詰めてください。この物語の様に皆さんがハチドリになってください。」と伝えました。印象に残った参加者が多かったようでたくさんの感想が寄せられました。

「ジェンダー問題」と「環境問題」の同時解決を目指し活動する萩原氏の未来世代に向けた熱い思いが届いたのか、会場では講師の話に耳を傾け、熱心にメモを取る

参加者が多くいました。「2つのテーマについて考える機会となった」や「ジェンダーと環境が繋がっていたことに驚きました」との感想から、今回のテーマについて関心の高さを伺えました。

※『Tokyo Kasei Press Vol.98 (2023.10)』（学校法人渡辺学園 広報誌 なでしこ）に掲載された記事と同じ内容です。

謝辞

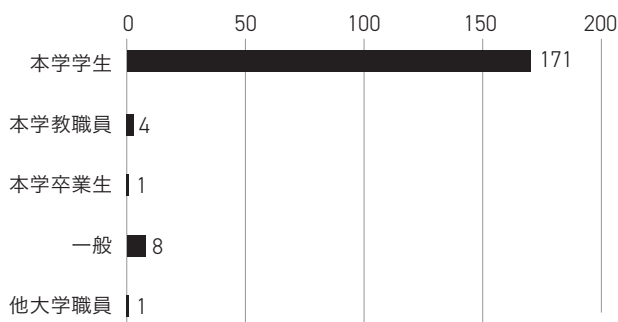
今回の講演会を開催するにあたり、前女性未来研究所担当職員、ヒューマンライフ支援機構生活科学研究所を始めとした多くの学内部署の皆様、そして、オンライン配信関係では有限会社エムエージー様、写真撮影ではカメラマンの梅沢香織様にご協力いただき、大きなトラブルなく講演会を開催することができました。

また、ポスター・チラシ制作・印刷では、株式会社Craps様、上毛印刷株式会社様にお世話になりました。ご協力いただきました皆さまに感謝を申し上げます。

誠にありがとうございました。

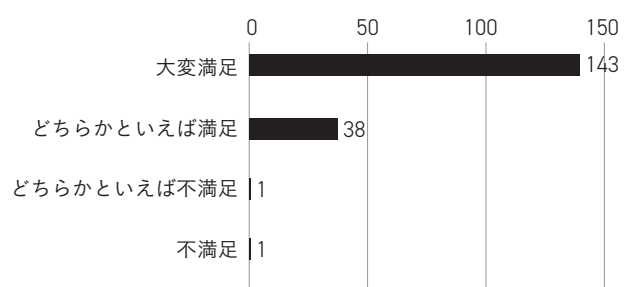
「ジェンダー平等の実現のために～環境に優しい持続可能な社会と私たちの役割～」 アンケート集計結果 回答数：185

Q1. 所属などを教えてください。

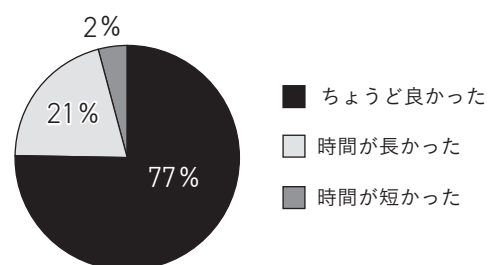


Q2. (本学学生のみ) 学籍番号を教えてください。
→学籍番号入力のため除外しました。

Q3. 講演の満足度を教えてください。



Q4. 講演会の時間はいかがでしたか？



Q5. 講演会の感想をご記入ください。(一部抜粋)

自分の知らないジェンダーの問題などについて知ることが出来た。ちょうどスタートアップセミナーで同じような内容のことについて考えていたので参考にしたい。

世界大戦後農薬や殺虫剤が街の中で撒かれている映像を見て、人が普通に生活している場に殺虫剤や農薬が撒かれていることが、当たり前のことのように行われていたことにとても衝撃を受けた。

ちょうど今ほかの授業でもジェンダー平等について考えていたので環境と照らし合わせたジェンダー平等についての知識も増えてまた新しい見方ができるようになりました。ありがとうございました。

環境問題とジェンダーの問題を関連させて説明していたので分かりやすかったです。持続可能な社会を実現するために何ができるのかを考えて生活したいと思いました。

身近なものや環境と言って、非常にわかりやすくジェンダーについて学ぶことができた。ジェンダーといっても幅広いと言うことを痛感した。先生の歌がとても上手でした。

環境問題と女性問題を同時並行で解決するのはとても難しいと感じた。何事も経験しないと分からない大変さがあり、経験もしていないのに口だけ出すのは当事者からすると納得いかないと思った。

大学生になって、他授業などでもジェンダー問題に触れることが多くなって、自分が気づいたことできることには少しずつ取り組みたいと思います。

100年以上前から、男性優位の社会で女性差別を受けながら、女性が活躍する社会について行動していたということに驚きました。まだまだ女性だからといって様々なことが生活の中で制限されていますが、今私たちが大学と言う場で自分の学びたい学問を勉強できているというのは昔の人の働きかけのおかげであると感じました。今の状況を幸せに思い、生活したいと強く思うことが出来ました。

ジェンダー問題・環境問題の両立はかなり難しい問題ではあるけど、長い時間をかけて少しずつ良くなっているのが、今後1人の女性として頑張ろうと思えるようになりました。

今回ジェンダー差別について話を昔の歴史から詳しく聞けて、とても勉強になりました。

今も差別はまだあるけど昔と比べたら変わってることからちょっとずつでも変わっていくことができると感じました。

ジェンダー問題と環境問題に繋がりがあることを知ることができました。自分たちにやるべき課題がたくさんあることを自覚したので、これからの意識改革に努めたいと思います。

ジェンダー問題は過去に比べて少しずつ解決されてきているというのがお話を聞いて実感したので、今後自分自身も問題と向き合っていきたいと思いました。

ジェンダー平等の本当の意味、今後の課題など分かりやすく知ることが出来ました。今後もし、なんか違うなと気づいたことがあればそのままにせず突き詰めることが大事なのだと実感しました。

実際に40年かかることにとても絶望を感じたし、これからどうなるのか不安も大きいけれど、未来の女性のために戦い続けることが大事だと思いました。

ジェンダー問題も環境問題も自分が正しいと思ったことを続けることも大切だが、新しい考えも取り入れて生きることが大切だと感じました。

ジェンダー問題と環境問題を両立して解決するのは難しいけど自ら1歩踏み出して行動することが大切だと分かりました。

ジェンダー問題と環境問題、どちらもすぐに解決するわけではないけれど、私たち1人1人が日々の行動の中で意識をすることが解決の一助になることがわかりました。公演していただきありがとうございました。

ジェンダーと環境問題の同時達成を目指していくのは難しいことだが、これが一番重要になってくるのだなと思った。沈黙の春、まだ読んだことがないので読んでみたいと思った。

ジェンダー平等と環境問題改善を同時に行っていくのはとても難しいが、ためになることだと感じた。自分自身で疑問に感じたことはそのままにせずに周りに聞いてみようと思う。

自分自身、ジェンダーの違和感や女性が下に見られている現状について、悲しい思いをしてきたので、これから活発に活動していきたいと思います。

萩原先生がすごくパワフルな方で、自分とは違う世界を沢山見てきた方だと思うので、講演を聞いていてすごく新鮮でした。また、ハチドリなどの小話もたくさん聞けて印象に残りました。

印象に残ったことがとても多くとても良い経験をしました。一人一人が少しでも行動するだけで未来が変わるのではないかと思います。そして、先生の歌がとてもお上手でした！！

ジェンダー問題や環境問題について聴くことが出来て良かったです。どんな将来になっていけばより良い世の中になっていくのかというのを考え直すきっかけになりました。環境、ジェンダーの問題は両立することが難しいように感じたが、上手く折り合いがつけられたらいいと思いました。

今までの考え方が大きく変わった。

ジェンダーだけではなく、実際に先生の実体験などの話を聞くことが出来、とても興味を持った。また、自分もハチドリのように勇気ある1歩を踏み出せるような人物になりたいと強く感じた。

一時期生理用品の話題がSNSで話題になり、布ナプキンを使うべきだという意見が男性側、一部の女性側から出ていて不衛生、洗う手間が増えるなどといった反対意見が押しつぶされてしまった現場を見たことがあり、少し不快に思っていたのですが今回の講演会を聞いてあの時行動するべきだったんだなと感じました。

実際に女性差別問題に取り組んでいる方から経験を元に具体的な話を聞くことが出来、自分も積極的に行動し社会を変えたいという意識を持つことが出来ました。

ジェンダーに向けて今までは解決するために何をすべきか、何が大切かなどしか考えたことが無かった。しかし歴史に沿って説明をしてくださったおかげで自分では気づかなかった昔の事を知ることができた。

環境問題は消費者問題、ジェンダー問題と深く関わっていることが分かりました。私は特に最後の鳥が火事になったことに気づいて一滴一滴水を運ぶ話が印象に残りました。私も何か気づいたら小さなことでも行動できるような人になりたいと思います。

ジェンダーと自然環境の問題の関連性をあまり考えたことがなかったので、お話をお聞きして深く関わりがあることに驚きました。先生のように多くの場所へ足を運び、自分の目で見えて考えていくことの必要性を感じました。

ジェンダー問題と環境問題を結びつけてお話をしてくださり、今後生きていくのに考えさせられる内容だったと思います。具体的な例をあげられてとても分かりやすかったです。なにより先生の話のテンポが良かったです。ありがとうございました。

スタートアップセミナーでジェンダーや環境についてやっていますが、この機会にさらに深く色々なことを調べてみようと思いました。

ジェンダーに関してだけでは解決できないことが多いということが分かりました。今回は環境とジェンダーについてでしたが、世界的に解決していかなければならないことは様々なことに繋がっており、少しずつ時間をかけて解決していくことが大切なんだな気づきました。とても興味深い内容でした。

ジェンダー平等と環境問題、双方を考えることはとても難しいものだということがわかりました。私は編入生でどうしても大学に入りたいので三年次編入しましたが、昔は大学に入ると就職に不利になることに驚きました。そこは変わってよかったです。

ジェンダー問題と環境問題は深く関わっていることを知れました。明日から、気付いたことを少しずつ始めていきたいと思いました。

講演の題を見た時難しそうな話したと思っていたが、先生の説明が分かりやすく楽しかったので理解することができた。決定の場に女性がいることが大事であるという言葉が心に残った。決定の場で女性としての意見をしっかりと伝えたい。

萩原先生が実際に行ったことと今現在のジェンダー問題、環境問題について細かく説明されていて非常に良かったです。また、私達がこれから何を行っていかねばならないのか、ジェンダー平等問題の解決にはどのような取り組みをすればいいのかも知ることができた他、家庭経営学で学んだジェンダーバイアスやアンコンシャスバイアスについても触れていて、とても興味深く聞くことが出来ました。ありがとうございました。

ジェンダー問題を変えていくには一見解決につながらないようなとても小さなことでも気がついたり、思い立ったりしたら自分から始めて続けることが大事だということが印象に残りました。

ジェンダー問題と環境問題は一見関係がないように感じましたが、災害時の被害者への支援の男女差など、視野を変えてみると繋がりがあることに気が付きました。私も普段から何か疑問に感じるものがあつたらそのままにせず追求していき、なにか変わるきっかけになればいいなと思いました。

ジェンダーの問題に向き合っていくにはまず自分の意識を変えていく必要があると感じました。「自分は自分」だと考えて、自分に自信を持って生きていけるようになります。

環境問題とジェンダー差別の問題はこんなにも深く関わっていると知り、とても興味深かったです。例えばおむつで紙おむつと布おむつどちらの方が良いかと考えた時に結論を出すことが難しいと実感しました。自分にできることを少しずつ頑張りたいと思いました。

ジェンダーバイアスについて改めて考えさせられる講演会でした。私たちは先入観からホワイトタイガーとトラの区別をしたりとまだまだバイアスを変えていかなくてはならないと感じました。

ジェンダーについてよく問題になっているが、環境問題という面からのお話もあり大変興味深かった。一人ひとりが気づいた時に何か行動していくことが大事だというお話が印象に残った。

ジェンダーと環境問題をどちらとも考えていくことの大変さを知った。また私も含む世の中の全員が環境問題についてできることを少しずつやっていくことが大切だと思った。便利な世の中になることは良い事だがそのリターンを考えて生活しないといけないと感じた。

本日は貴重な講演をありがとうございました。わたしは今授業でジェンダー教育、男女差別について学んでおり、まさにわたしにぴったりの講演でした。わたしが思うよりもずっと深刻で、たくさんの方が折り重なっていることを知り、わたしにできることを精一杯やっつけていこうと思いました。

素敵な先生の講演を聞いてとてもためになりました。ありがとうございました。

講演会の話聞いて、性別的役割分業を改めて見直す必要があると思った。ジェンダー平等を目指すために、できることから始めたいと思う。ジェンダー理解が深まるために、40年かかると知り驚いた。それぞれが、理解を深める必要がある。今日はありがとうございました。

知らないジェンダー差による問題があつて衝撃を受けた。昔はそんなこともあつたのかと思った。男子と同じく就活の舞台に立てないことにガッカリした。少しずつ変わってきてはいるとわかった。ジェンダー平等と環境改善は大きく関わっていて両方達成を目指すために時間をかけながら少しずつ進んでいきたい。

最後のハチドリの話がとても印象に残りました。気づいたことはそのままにせず発信することが大切と聞いて自分も疑問に感じるものがあつたりするので発信してみたいです。ありがとうございました。

私も実際に感じることもあるジェンダー格差は環境問題とも関係しているということが分かり、貴重なお話を聞くことができて良かった。私も小さなことでも気がついた時に行動してみようと思った。

私たちの生活と環境問題そして女性の解放はどれも密接に関わっていて、同時に叶えるというのがすこし難しいように感じました。

問題が大きすぎて果てしないように見えてしまいますが疑問、関心を持つというのがとても大切だなと感じました。

ジェンダーと環境は関係ないと思っていたけれど、片方の達成を目指すことで、もうひとつの目標達成から遠ざかってしまうと知って、いくつもの社会問題の観点から取り組んでいこうとおもった。

少しでも違和感を感じ、それが他者からの理解が得られなかったとしても勇気を持ってその問題に取り組んでいくことが大切だということを学びました。また普段何気なく使っているナプキンですが興味を持ったので今度分解をしてみようと思いました。新たな発見がたくさんあり本当にためになりました。もっとたくさんの人に広まって欲しいと思いました。ジェンダー解決40年が少しでも縮まるように私も少しずつできることを身近なことから探していこうと思います。

ジェンダー問題や環境問題の目標は両方達成することで、改めてSDGsの課題の一部が達成されるということが分かりました。とても講演聞いていて楽しかったです。ありがとうございました。

ジェンダー平等には40年かかると聞いてとても長く感じ、本当に平等になる日は来るのかと疑問を抱きました。少しずつ平等になりつつあると聞いて達成までの期間は長いですが平等になることを願っています。

女性の立場と環境両方の視点から、考え方を考えていかなければならないというお話、とても考えさせられました。自分が持つ偏見や無意識のうちに思い込んでしまっていることなど、全てを考え直していきたいです。

ジェンダー問題と環境問題が関係しているということに今日初めて講演を聞いて気がついた。2つを解決させるのは難しいことだと改めて思った。けれど、どちらも重要で解決をしなければいけない大きな問題であると思う。

男女の差別は無意識から行われていることがわかりました。萩原なつ子先生が、例えば、ホワイトタイガールの写真を見せられて、これは何に見える？と質問しました。私はホワイトタイガーだと思いましたが、他の人は普通の虎だと思っており、虎のイメージを無意識に偏見していたことがわかりました。なので、この偏見を無くすためにも自分で出来ることを見つけて、無くしていこうと思いました。

今まで中学の時から様々な講座を受けて来ましたが、こんなに面白いなと思える講座は初めてでした。今受けている授業の中で、地震と貧困問題の結びつきについて考えているのですが、森永のチョコレートを買うと1円募金のような形で送られるというのを聞いて、地震対策にも繋がりそうだと思います。

ジェンダー平等の問題を解決しようとする、環境問題などの他の問題への解決が遠のいてしまうので、色々な問題を同時に解決していくためにどのように行動すればいいかの塩梅がとても難しいと感じた。私に出来ることを少しずつ、一つ一つ気づいたことからやっっていこうと思った。

当たり前だったことをそうではないと気づかされる時代になってきていることをひしひしと感じました。ジェンダー平等の観点からもそういった点をしっかり見つめ直したいと思います。

環境とジェンダーが密接に関わっていることに驚きました。男女格差による経済格差がここでも影響を及ぼしていることを知ることが出来ました。

また、最後に美しいと綺麗な違いを知りなんとなく引かかっていたことが無くなりました。

自分の美の基準を誰かに押し付けることも比べることもなくていいのかなと思いました。

環境問題の解決とジェンダー平等社会を一緒に目指すことの難しさを改めて感じました。自分が日常で感じた少しの違和感から社会が大きく変わるかもしれない、そう信じて自分でも何か行動してみたいと思いました。

一人ひとりの判断が社会を変えられる力を持っていることについて、その成功体験が無すぎで、自分一人がどうにかしたところで世界は変わらないと思っているひとが多いのではないかなと思いました。また女性の社会参画が達成出来ていない点において、男女平等を促すうえで教育の場などひとつが平等になったことで満足している部分があるのではないかなと思いました。

未来の子どもたちに手渡せる環境と食を残す目的で、オーガニックマルシェを開催しています。今年で4年目の活動ですがなかなか売り上げが上がらず、応援してくれる人もわずかです。

本日のハチドリのひとしずくのお話が大変胸にひびき、もう少し頑張ってみよう元気をいただきました。ありがとうございました。

女性の問題を環境問題と交えて話されていて興味深かったです。今からでもできることを聞いて理解を深めようと思った。ジェンダー平等を実現するのに40年かかるといふのに驚いた。レイチェルカーソンさんを知らなかったので今回初めて聞いて偉大な人なのだと良いことを学んだ。

軽快で博識な講演で、とても勉強になりました。アマゾンのハチドリが心に響きました。私共の学生にも伝えたいです！ありがとうございました。

学びになること、刺激を受けることが多くありました。特に、ジェンダー問題と環境問題は繋がりがあつたことに驚き、言われてみればと深く納得しました。この公演を元に、自分の生活による環境への影響を考えてみて、出来ることから実行したいと思います。

紙オムツや化粧品などとジェンダーの関係の話が印象的でした。自分の意識から変えてジェンダー平等と環境保全に貢献していきたいと思いました。そしてそのために現在の問題について知りたいです。

今回の講演で女性だからこそ考えられるような環境問題や、ジェンダー問題がたくさんあるなど改めて気付かされました。私もさまざまなことに目を向けて活動していきたいです。

ジェンダーの問題は環境問題とも繋がりが、両方の同時達成を目指さなくてはならないということが分かりました。非常に難しい問題ではありますが、自分に出来ることを気づいたのなら勇気を持って一歩踏み出して行動を起こしていきたいと思います。

ジェンダー問題だけではなく、そこから繋がる別の問題の発見とそれらの同時解決についても話の中で考えなければいけないと思いました。同時に多くの問題は別の問題と繋がっていることから、意識すれば自然と多くの視点で1つの問題を見ることができると考えています。

初めはジェンダーと持続可能な社会にはどんな関係があるのだろうと不思議に思っていました。しかし、講演を聞くうちにジェンダー問題が解決すれば社会環境もよくなることもあり、逆にジェンダー問題を解決すると環境に悪影響を与えてしまうことがあると分かり、この2つには密接な関係があるのだと感じることが出来た。

ジェンダー平等と環境に優しい持続可能な社会について、様々な面から考える良い機会になりました。『一人一人の小さな政策決定が大切。』という言葉が一番印象に残っています。ジェンダー平等が達成できるまであと40年もかかるということに驚きましたが、少しずつでも社会を変えられるよう、私も普段の生活の中で気づいたことから挑戦して変えてみようと思います。

私はこれまで、ジェンダー平等と聞いてもイマイチピンと来ず、男女はそれぞれ違うし尊重し合うことは出来ても平等な世の中など作れるのだろうか、と思っていたのですが、今日の講演会を通して、先生が事細かに説明してくださったおかげで、私たちが少しずつでも活動を続けていけば、いつかは男女がそれぞれ平等な世の中が来るのではないかと希望を持つことが出来ました。

環境問題の解決とジェンダー平等社会の実現を一緒に目指すことの難しさを改めて感じました。日常で感じた少しの違和感から社会が変わっていくことを目指して、自分でも何か行動してみたいと思いました。

環境問題もジェンダー問題も同時に解決する必要があるというところがとても心に響きました。私の中では、全くの別問題だと思っていたので、新たな視点からの講演で、とても興味深く聞かせて頂きました。女性が楽をするために紙おむつが作られたように感じてしまいますが、育児は女性のものという考えがなければ、紙おむつは生まれなかったかもしれないし、それぞれ当事者にしか分からないこともあるので、今後もっと研究されて欲しいし、それを世界中の人にもっと広く伝達して頂きたいなと思いました。

ジェンダー問題と環境問題に繋がりがあることが新しい発見だった。おむつや生理用品、化粧品は私たちの生活を豊かにするものだけどそれが環境問題にどう関わっているのか消費者として考えていきたいと思った。今日は素敵な講演をありがとうございました。

身近なこと(生理用品や紙おむつなど)が環境問題やジェンダー問題に関係していることがとてもよく分かり、とてもためになった。この話をする時にまず、ごめんなさいと言っていると話されていたことが印象に残っている。ジェンダーや環境について詳しく研究している人のせいでは決してないのに、もっと皆が意識を持つべきことだと思った。

私は就職活動をしていて女性の社会進出についてやジェンダーの問題について触れる部分が多くあった為、考えさせられる事が多かったです。貴重なお話をありがとう。

講演会を通して、意思決定する場所に、女性の発言権が尊重されることが必要だと改めて思いました。また、環境目標の達成と男女平等目標の達成、どちらも目指すことが大事だと感じました。参加して良かったです。実際問題女性の身体能力は男性よりも劣るので仕事内容の差別をなくすというのは不可能だと私は感じます。ジェンダーの平等と効率や公正な判断というのはやはりなくなることはないでと感じています。そもそも臓器が違うのだから違う生き物として私は捉えています。男性にも女性にもできることは分担して、男性にしかできないことや得意分野、女性にしかできないことや得意分野を見極めて、平等を訴えるばかりではなく役割分担をしていき、そこに生まれる報酬や評価の平等性を私は大事にしていきたいかなと思いました。

ジェンダー平等と環境問題の両立は大変なんだなと思いました。オムツの話も女性が洗うという固定概念を無くせば良いとは思いますが、現状布おむつにした場合に女性が洗う率はすごく高いと思うので難しい問題だなと思いました。

とても面白かったです。私はジェンダーや環境問題に興味を持ってそれらについて学び始めてからまだ日が浅いので、昔から全然変化していないように感じていたのですが、少しずつ変化しているというお話を聞いてなんか少し安心しました。

私もこの世の中を生きている一員として、常にそのような問題について考えられることを行なっていこうと思います。

この講演会を通じて、再び女性の在り方について考えさせられました。私にとって一番印象的だったのは、私たちの生活環境における意思決定をどのように培っていいのか、倫理的な観点から考えを深めることができるのかということです。これには、些細なことでも興味を持ち、疑問に思ったことを積極的に追求し、行動に移すことが重要だと感じました。

持続可能な社会を目指すこととジェンダー平等の実現を目指すことの深い関わりについて、変革の歴史の説明を交えてわかりやすく教えていただきました。一人の人として真摯に自分のできるところから取り組んでいきたいと思っています。

ジェンダーの平等と環境の保全を両立するのは大変難しいと思った。しかし、昔から見ると少しずつ変わっていると聞いて改善しようと尽力し続けることは大切だと感じた。

ジェンダーについてすごく考える時間でした。女性科学者である、エレン・リチャード・スワローとレイチェル・カーソンを知らなかったのでまた調べて見ようと思います。

東京家政大学ヒューマンライフ支援機構女性未来研究所主催 ハイブリッド講演会 「わたしの生き方 わたしたちの未来」

卒業後から現在まで専門性を活かし、「縁の下の力持ち」として真摯に仕事に打ち込んできた本学卒業生の長谷川美香子氏からこれまでの歩みと未来についてご講演いただきました。先行きが不透明な時代に自らの道を切り拓き、走り続ける長谷川氏の経験から未来へ羽ばたくためのヒントを探してみましょう。

【講師紹介】

長谷川 美香子 氏

本学卒業生・令和4年度渡邊辰五郎奨励賞受賞
本学卒業後、アパレル企業で経験を積み、その後フリーパタンナーとして独立。以降はパリ・ミラノコレクションを含む国内外へパターンを提供。また、培った知識と技術を活かし、パタンナーの育成やブランドコンサルタントとしても活躍の場を広げています。



東京家政大学
ヒューマンライフ支援機構
女性未来研究所主催

わたしの 生き方 わたしたちの 未来

卒業後から現在まで専門性を活かし、「縁の下の力持ち」として真摯に仕事に打ち込んで来た卒業生に、これまでの歩みと未来の展望についてお話いただきます。社会を取り巻くあらゆる環境が複雑さを増し、先行きが不透明で見えない時代だからこそ、自らの道を切り拓き、走り続けている卒業生の経験から、未来へ羽ばたくためのヒントを探してみませんか。

ハイブリッド講演会
参加無料

令和5年
11/9(木) 15:30-16:30

対象年齢 本学関係者のみ 三木ホール(小講堂)
オンライン 学外者対象(ZOOMウェビナー)
参加 オンライン参加のみ参加費が必要です。
(※ZOOM参加は別途ご案内)
登録締切 令和5年11月8日(水)
主催 東京家政大学女性未来研究所
お問い合わせ E-mail: josei-mirai@tokyo-kasei.ac.jp
東京家政大学女性未来研究所は、非営利のNPOです。

講師
長谷川 美香子氏
(本学卒業生・令和4年度渡邊辰五郎奨励賞受賞)
本学卒業後、アパレル企業で経験を積み、その後フリーパタンナーとして独立。以降はパリ・ミラノコレクションを含む国内外へパターンを提供。また、培った知識と技術を活かし、パタンナーの育成やブランドコンサルタントとしても活躍の場を広げています。

東京家政大学
TOKYO KASEI UNIVERSITY

東京家政大学
女性未来研究所

QRコードの登録(リンク)アンサーウェブの登録は不要です。

座右の銘は「衣道魂高」

東京家政大学服飾美術学科出身、座右の銘は「衣道魂高」。高校生の進路決定の時期に、「衣の道において魂を高めゆく」という意味でこの造語を考案し、自身の座右の銘として、今もなお使い続けています。また、ものづくりにおける『ツクリ』という表現はどの漢字も当てはまらないと感じていることからカタカナを利用しています。

フリーランスのパタンナー

現在はパタンナーを主軸としてフリーランスで活動しています。主にコレクションブランド、スポーツメーカー、ゴルフメーカー、レディース、メンズ、犬の服まで、幅広い分野でパターンの製作に従事しています。パタンナーはアパレル製品の製作過程において中央に位置し、企画から販売までのプロセスを包括的に理解しています。その経験を活かし、アパレルブランドの経営、企画、生産において、コンサルタントとしても活動。また、母校（東京家政大学）の服飾美術学科で非常勤講師として、主に洋服をゼロから製作する（デザインからパターンを設計し、裁断・縫製し、完成した作品の考察を行う）造形の授業を担当し、昨年（令和4年度）までの10年間、教鞭をとりました。

展示作品（洋服）の紹介

私の家系は、母親が東京家政大学で助手を務め、母方の祖母は緑窓会（東京家政大学同窓会組織）の東京支部の設立に関わり、母方の曾祖母、さらに父方の祖母も卒業生と「東京家政大学」と縁の深い一家です。本日の講演では、舞台上に3着の洋服を展示しました。中央に展示されたコートは、約80年前に私の祖母により製作されたコートで、当時の東京家政大学の知識、技術を鑑みることができる素晴らしいデザイン・仕立てとなっています。その両端に展示した2型は私自身が製作し、ムック本に掲載されたジャケットとブラウスです。このブティック社から発売されている『COTTON FRIEND SEWING vol.7』というムック本は、掲載されているデザインの型紙が付録として付いてくる特別な本となっています。

アパレルの仕組みとパタンナーの位置づけ

講演会には服飾美術学科以外の参加者もいるため、アパレルの仕組みとパタンナーの位置づけについてご説明します。



アパレルは、衣服や小物、アクセサリなどを扱っている企業形態やファッション業界を総称する言葉です。『企画』では「何を作るか、何を売るのか」を決めます。次に『生産』では、工場に依頼し、依頼通りに仕上がるかを管理しながら完成させます。そして『販売』で購入してもらうという商売形態です。デザイナーがデザインして製作されるというイメージをお持ちの方が多いと思いますが、デザイナーはプロデューサーやディレクターとしての役割を担い、ブランドの世界観をつくるということも期待されています。販売では、「プレス」という役割が、ブランドをどのように見せていくか、また、顧客となるターゲット定め、何を媒体とするか（誰に着てもらって宣伝するか）の戦略を練ります。「MD（マーチャンダイザー）」は、数字を見ながら、どんな売れ方をしたのか、季節や天候に左右されたかなどを分析し、フィードバックするだけでなく、営業企画の管理も行っています。そして「パタンナー」はデザイン画からパターンを起こす役割（設計する）というイメージを持つ人が多いですが、私は、『ものづくり』というものは、技術向上や完成度に加え、生産工程や販売実績データも理解した上で仕事をするものであると考えています。パタンナーは、デザイナーや商品開発チームの指示に基づいて製品のパターンを作成する役割を担っています。加えてデザインのコンセプト、トレンド、マーチャンダイジングの戦略、企画に関わる知識が不可欠です。ブランドマトリックス（ブランドの関係を視覚的に示した図表）、ターゲットの年齢層、位置づけによってどのようにものをつくるかを考えブランドに適したサイズ感、ディテール、細かい寸法、設計がパタンナーに委ねられています。また、サンプルの作成や生産スケジュールの調整など製品開発全体の生産に関わるプロセスを指揮する役割を担うこともあります。具体的には、サード（1つのデザインから、修正を経て製作される3着目）まで作成する余裕があるのか、付属（製作に必要な釦（ボタン）

やファスナー、テープや芯など、生地以外のアイテム)がいつ届くのか、二次加工はどのタイミングで行うのかなど、生産の工程を理解した上で、生産プロセスに関わる問題を解決すること、加えて、裁断や縫製、加工などについても実践できる知識を持つことが求められます。仕様変更の際には、しばしばパターンと仕様書だけではなく部分縫いなどの見本を付けることで進行がスムーズになることもあります。製品のクオリティを左右する工場のグレードや設備などは、素材や仕様も含めたコストとの相関が高いため、ブランドの価格設定によって選定する必要があります。工場やデザイナーと話し合いながらデザインの細部までバランスをとる役割を担うため、ヒヤリングやコミュニケーション能力が必要です。また、高級衣類の製作に関わる場合は各メゾン（一般的に歴史をもつトップレベルのハイブランドやその会社）の世界観や歴史を、知識、技術、テクニックとして持ち合わせる必要があります。

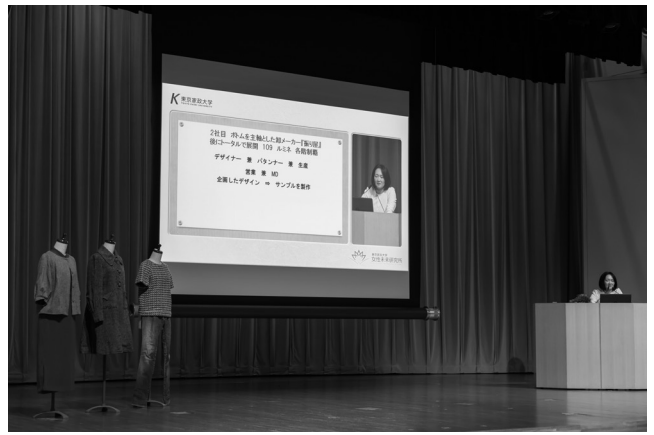
アパレルでは、製品を売るまでが1つの商売という考え方もありますが、私は製品がお客様に届いてから初めてコミュニケーションが始まると捉えています。

長谷川 私たちも洋服を購入し、何度も着る服はもう一度そこに買いに行きますよね。逆に、何度も何度も買っていたお店で何か1つがっかりすることがあると、もう二度とそこでは買わなくなってしまう。

現在は、アプリなどで顧客管理がとても明確となり、確実にお客様が増えたり、減ったりしたことを把握し、次に結び付けることができます。手を抜くことは絶対に許されないという意識を忘れずに、愛を持ってツクリ続けることを大切にしています。

社会に出て実感した 「建学の精神」と「生活信条」

日々の生活や仕事、私の場合は、市場へ届ける責任を果たすために、より良いものツクリをしたいという「愛情」から始まり、そのためにより多くの知識と技術の習得を目指す「勤勉」、学んだ知識と技術を適切に活かすには「聡明」さが不可欠です。社会人となり10年くらいを経て、本質的な意味で「愛情」、「勤勉」、「聡明」が腑に落ち、これを継続していくことはまさに「自主自律」であると実感しました。本学の生活信条には今もなお、助けられています。



成長曲線とプラトー

私たちが何か新しいことを学んで努力をしていく時の成長曲線は、横軸を努力の時間、縦軸を成長とすると、初期に力が付いていき、その後なだらかに右肩上がりに成長していくのが人間の理想（希望）成長とされています。実際、最初は自分の努力に従って成果もしっかり見えてきます。しかし、必ず停滞する時期がやってきます。この期間を「プラトー」といいます。「うまく成長しない」、「努力しているが、なぜか成果が上がらない」という「プラトー」が続き、ある日突然ブレイクスルーすることを人間は繰り返しながら成長します。

これを知っていると、自分の努力が実らない時に踏ん張れると思いませんか？

「100万人に1人の存在」

次に私が卒業した一条高校（奈良県奈良市）の校長を務めたリクルート出身の藤原和博氏が推奨している「100万人に1人の存在」を紹介します。現在、「教育改革実践家」を名乗る藤原氏は、今日の「アクティブ・ラーニング（総合学習）」の元となる「よのなか科」の考案者です。「100万人に1人の存在」とは1つの職業で約1万時間取り組むとその道のプロフェッショナルになれる、この時点で「100人に1人の存在」となります。私の場合で当てはめると、会社で約10年勤めてパタンナーとして独立したところで、「100人に1人の存在」となり、その後、パタンナーとして一部分の仕事だけではなく、生産やその他企画にも携わるものツクリを続けることで別の「100人に1人の存在」となります。これをかけ合わせると「1万人に1人の存在」になります。

藤原氏は、さらに加えてもう『1万時間』、最初にかけた『2万時間』とは全く別のことに時間をかけることで「100万人に1人の存在」となると提唱しており、私にとってのもう『1万時間』は、東京家政大学での非常

勤講師の経験であり、技術や知識を伝える（共有する）ノウハウを持つ人物となりました。

長谷川 『1万時間』で「100人に1人の存在」で終わってもいいし、「1万人に1人の存在」でもいいと思いますが、どこかのタイミングで「100万人に1人の存在」になれるチャンスがあるなら、逃さずに努力を続けてほしい。家庭に入り、家事をして1万時間過ごしても、それは「家事のプロフェッショナル」。
だから、何か自分の中で核になるものを作ってもらいたい。

大学生時代

学生時代の話はもちろん時代が違うし、単位取得方法も今と違いますが、私の学生時代を振り返ります。

1～2年生の時は、卒業に必要な最低単位数の3分の2を取得。3～4年生では、専門科目を手当たり次第履修登録し、自分に向いていないものはやめる選択をすることがありました。そして、よく学び、よく遊び、たくさんバイトをして、複数のインカレサークルに所属していました。その頃の仲間とは今でも楽しく遊んでおり、皆が「1万人に1人」「100万人に1人」の存在になっているため、ジャンルは違えども、共通することは多く、互いの考えを共有できるのは学生時代があったからこそです。

就職活動中に魅了された パタンナーという職業

～「衣道魂高」アパレルで働きたい！～

就職活動では、各社の説明会に通う中、パタンナーという職種に出会い、可能性を感じます。ディテール・サイズ感・シルエット・商品の雰囲気というデザインのアイデアを具体的な形に変え、実際の商品として形にしているのはパタンナーではないかと気づきました。また、洋服のシルエットやフィット感など、細かな部分までこだわりを持ちながら、製品を完成させるプロセスに魅了されました。

3社のアパレルメーカーに在籍して得たもの

運よくパタンナーとしてキャリアをスタートでき、社会人としての最初の3年間をレディース・ヤングキャリア・アパレルメーカーで過ごします。15名程度の小さな会社のため、育成システムが確立されておらず、大

卒では即戦力にはならず、できるのは目の前にあることに向き合うこと、と日々を過ごしていました。

当時のアパレルではセールの時期に「若手は販売応援に行く」という慣習があり、私も卸先へ販売応援に行きました。ここで仕事に向き合い、販売戦略を練り、販売実績を作ったことから、エリアマネージャーや店長から「すごく販売に向いている」、「営業職も適性がある」と本社へお褒めの言葉が届いたころ会社が自社店舗を持つことになり、ある日突然、「部署異動:販売員」と辞令が。しかし、「私は、パタンナーとして生きていくと決めています」と拒否したところ、「では、辞表を持って来てください」と言われ、仕方なく辞表を提出。退職が決まってから直ぐ取引先へ現況と共にお礼を伝えました。特に販売員を推薦して下さった皆さんには恨みというスパイスを入れてご挨拶をしました。これが功を奏し、先のエリアマネージャーの紹介で転職先が決まります。

社会に出ると必ず会社は、他社とつながりがあります。色々な人との出会いや関わりを通じて、話をしたことがない人だとしても自分のことを見てくれます。必ず誰かが自分の仕事を見ています。販売を推薦してくれた方から「パタンナーとして成長するなら、ここがいい」と紹介された2社目は、ボトムを主軸としたメーカーでした。当時は各店舗や店頭がメーカーによって企画された製品を発注し自社ネームを付けて売というのが小売業の販売方法として主流でした。この約15名の小さな会社では「デザイナー」兼「パタンナー」兼「生産」をしていました。自分のデザインや営業兼MDの企画からサンプルを製作し、営業兼MDがそのサンプルやデザイン画を小売業者へ持ち込み、発注を受けます。発注数を製作できるように生地や付属を発注、工場へ依頼、確認をしながら完成までを管理、チェック、小売店へ発送。という一連の動きをこの会社で担っていました。売上は右肩上がり取引先も増え、ルミネ新宿と渋谷109のどのお店にもうちの製品が卸してあるという状態になった時に、「そろそろもう少し価格帯の高いラインをやりたい」と思い、転職活動。無事就職先が決まりました。

3社目は希望通りのアッパーライン。ラグジュアリーアパレルメーカーで海外のブランドの代理店も担い、セレクトショップとして仕入れたアイテムの販売をしながら、自社のブランドも展開するというスタイルの会社でした。ニューヨークやパリでエキシビションを行い、同時にセレクトショップの最高峰と謳われたコレット（パリ）にも商品が並びました。世界的なスターや芸能人、有名どころからの注文やミュージックビデオの衣装など、ここで海外での仕事に対する抵抗がなくなったこと、海



外へ向けてのパターン製作上の注意点を理解できたのは後の強みとなりました。

しかし、会社は今でいうところの「ブラック企業」、夜更かしをしながらの華やかな仕事でした。毎日はずごく楽しいけれど忙しすぎて、「じゃ、また8時間後にね」と言って終電で帰り、翌朝に会社に戻る日々が続くと、体調が崩れ、何度か入院しました。その後も寝不足が続き体力が追い付かず退職を決意します。

長谷川 寝不足は恐ろしいです。睡眠負債はすべての気力を奪います。皆さん、課題に追われて遅くまでやっていませんか？ちゃんと寝てください！

税金を納めるための「開業届」

3社目を退職し、ファッションから離れて休もうと思いましたが、自分自身がモラルに反しているように感じて休めないまま時間が過ぎます。「悩んでも解決しないから好きなことをやろう。そうだ！海に行こう！」と鎌倉でルームシェアをしてウインドサーフィンのインストラクター、JAZZを歌ってのアルバイトをしていたところ、その中や過去に知り合った方々からパターンの依頼を受けるようになります。

「頼むと引き受けてくれるらしい」と噂が広がったのか、依頼が増え、面識のない人からも連絡が来る状況が続きました。海にも行けないくらい忙しくなったある日、「お金を稼いでいるけど、税金の支払いはどうしよう」と気になり税務署に行きました。そこで選んだ申告方法に必要な『開業届』を提出。結果、税金を納めるために開業という結果を得た形です。「今、就職するとたぶん取引先が困るだろう」という思いから、この独立を受け入れて現在に至ります。この一連の申告のために一通り簿記も勉強しました。「貸借対照表」(バランスシート)や「損益計算書」(会社の利益を知る決算書類)が読めることで、会社の経営状況が分かるという強みは、後の

ブランドコンサルタントにも大いに役立っています。

長谷川 みなさん、お忙しくてお時間がないかとも思うのですが、学生のうちに取っておいた方がいい資格として、「簿記」と「ファイナンシャルプランナー」をお勧めします。

アパレルCAD(コンピュータ支援設計)というソフトは車が1台買える程度で高価でしたが、それを購入して多くの仕事をこなすことができ、信頼と使い勝手(共通ソフト)の評価を得ました。これにより仕事量も増加しました。また、フリーになってからは昼夜を問わずセミナーや学校にも通いました。どんなものにも流派があります。それは相手の流派に合わせないと会話が成り立たず、「この人は仕事ができない」と判断されるということです。その判断が正しいか間違いかは問題ではありません。仕事を受ける側は相手のものさしに合わせる必要があります。そのために相手が育ってきた環境の知識を学びました。共通言語を持つイメージです。そのおかげでアメリカ的なパターンやフランス的なパターン、イギリス、ドイツ、イタリアとそれぞれクセがあることも学べて、表現の幅が広がりました。

長谷川 私はパターンが面白くて、面白くて、学ぶことが苦になりませんでした。皆さんもぜひ自分の好きなことが見つかったら、思う存分深めてほしいと思います。

意識していること

～向き合う 手を動かす 後悔させない～

長谷川 仕事で意識していることは、「兎に角、向き合うこと。そして手を動かして確認すること」。モチベーションとして持っているのは、成功したいとか、有名になりたいではなく、「私に仕事を頼んだ人を後悔させたくない。がっかりさせたくない」だから、向き合う。

仕事に向き合うだけでは確認ができないため手を動かしますが、手を動かしたものを自分の価値観のみで判断せず、他の人に確認してもらい指摘されたことを直します。これを繰り返していくことでクオリティもあがり、必然的に信頼がついて仕事が増えてきたと感じています。

女性の労働市場への参加

2023年のノーベル経済学賞は、男女の職種・賃金格差に関する要因を解明し、労働市場における女性の役割の歴史的研究をされたハーバード大学のクラウディア・ゴールドフィン教授が受賞しました。

長谷川 日本は男女格差が大きい国として認識されていますよね。先日、SDGsの取引が始まったのですが、そのときにテープカットしているのが男性しかいなかったという衝撃の映像を私はすごく覚えています。2023年ノーベル経済学賞について、機会があったらぜひ深掘りしてみてください。

近年、女性の転職が3割から4割増加していると言われます。企業と女性のニーズが調和し、女性の転職者数が増加することで、男女の賃金格差が縮小する可能性があります。女性の管理職が少ないというのは周知の事実ですが、女性の選択肢が広がることで、キャリアアップを目指す方にとって新たなチャンスが生まれます。女性が働ける環境が広がったのは先人たちの努力の賜物であり、私たちもその価値を大切に受け継いでいきたいと考えています。

「手を動かす」ことは人生の価値を上げる

私は、考えがまとまらず言語化できない時に『ChatGPT』とブレインストーミングを行います。

長谷川 このままAIが進化すると、もしかしたら、人間が働かなくてもいい環境になるかもしれませんが、仮にベーシックインカムの実現があるのならば、人間には多くの時間ができます。少なくとも、テクノロジーによって時間の節約がなされてゆきます。そうなればその時、「手を動かす」ということの本来の価値を改めて私たちは理解できます。その意味で時代が追い付いてきたといえると思っています。

自分の真実は自分で見つける

皆さんも大きく世界中が変動していることを感じているでしょう。今、正しいと世の中で信じられていることが、来年、再来年まで真実であるとは限りません。その中で自分が信じられるものや、自分が考えるときの軸になるようなものを見つけてほしい、自分の真実は自分で

見つけていきましょう。

本は遠くにいる先生（参考文献紹介）

30代前半で独立し、様々な場面で異なる視点を持つ必要がある中、身近にはあまりロールモデル（お手本にできる人）がいませんでした。『本は遠くの先生』という文字通り、本から多くの知識を吸収し、成長してきました。私の講演内容における参考資料としてお気に入りの本を紹介します。

『アルケミスト 夢を旅した少年』 パウロ・コエリョ

これは物語です。お読みになった方もいらっしゃるかもしれないですね。こういった夢や希望あふれる物語には必ず哲学的な考えが隠されています。このような哲学的な考えというのは、人生のヒントになるのではないかなと思います。

『モモ』 ミヒャエル・エンデ

ミヒャエル・エンデは『はてしない物語』でとても有名な方です。『モモ』は児童文学なので、小学生の頃に読む本だと思います。もし、読んだことがある方がいたら、ぜひ『エンデの遺言』という本を読んでください。時間の大切さがテーマだと思われがちな『モモ』は、実は経済学の話であり、とても興味深い一冊です。

『男は3語であやつれる』 伊藤 明

これは学生の頃の私に伝えたい本です。学生時代、私はあまり人を褒めることができませんでした。しかし、自分の心の奥底のピュアな部分で、「この人すてきだな」と思ったら、伝えた方がいい。その伝えるときのセリフがたくさん書かれている本です。

『良心をもたない人たち』 マーサ・スタウト

これは注意事項でもありますが、皆さんの歩む道には人の足を引っ張ったり、陥れたり、邪魔してくる嫌な人が一定人数絶対にあります。「残念なタイプの言動だな」、「ちょっと何かとても嫌なことを言う人だな」と思ったら1歩離れましょう。このタイプの人たちと向き合うこと、これだけはやめて早く立ち去ってください。例えば、行き先が違う船に乗り、正しい方向に自分1人が走っても無駄です。なぜか自分の邪魔をしてくる何か嫌な人を判別するためにこの本はとても役に立ちます。

『西の魔女が死んだ』 梨木 果歩

『りかさん』 梨木 果歩

梨木果歩さんの本です。すごくほわっとした温かい話

です。自分が生きていくため、女の子が生きていくため、強さの芯になるようななにかが書かれている本です。私はこれを何度も読み返しています。

『良心の領界』 スーザン・ソントグ

この本を書いているスーザン・ソントグさんは非常に賢くて、とても冷静に物事を見られる方です。この本の冒頭で、「二度読まない本は読む価値のない本だ」ということをきっぱりとおっしゃっています。その通りだと思います。一つの考え方としてぜひ冒頭のところだけでも読んでいただきたいと思います。

『会社のルール ～男は『野球』で、女は『ままごと』で仕事のオキテを学んだ～』

パット・ハイム、スーザン・K・ゴラント、坂東 智子（翻訳）

これは私が社会人になるときに、「これは読んだ方がいい」と会社をいくつか持っている人から手渡された本です。当時絶版になっていましたが最近、復刻しています。社会はいわゆる「男社会」であり、「野球の考え方」でできている」という話です。監督がいて、監督に気に入られるために行動しなきゃいけない、でも、チームとしても勝たなきゃいけない、この考え方で会社はできています。しかし、女性は皆に役割があつて仲良くできる「おままごと」で育ちます。だから、会社に入ったときに何か違うし、何か合いません。本来は競うところで、しばしば女性は仲良くやろうとしてしまう。ここが難しいです。良いか悪いかは置いておいて、「社会は今、こういうルールで回っていますよ」という本です。ちょっと厚くて長い本ですが、キャリアを築きたい方はぜひ読んでください。

『入社1年目の教科書』 岩瀬 大輔

これは新人の方の就職祝いに私がよく配る本です。社会人になって1年くらい経つと、この知識が手に入ります。自分で行動しながらではなく、まとめてあるものをさらっと読んだ方が自分の身になるのも早いです。入社が決まったらぜひ読んでいただきたい本です。

『シリコンバレー式 自分を変える最強の食事』

デイヴ・アスプリー、栗原 百代（翻訳）

食事って食べ終わった後に眠くなりますよね。それがないように、「自分のパフォーマンスを正確に出せるようになりましょう」と言う本です。著者が論文を読み漁り、マニアックに自分で試し、それをまとめた本です。たぶん1万時間やっていると思います。とても読みやすいので、さらっと読んでみてください。

『100万人に1人の存在になる方法 不透明な未来を生き延びるための人生戦略』 藤原 和博

最後に藤原和博さんの本を紹介します。

質疑応答

質問1 ブラック企業で働いていたときに、パタンナー以外の職業に就きたいと考えたことはありますか？

長谷川 私の場合は、最初にお話しした通りの「^{いどうこん}衣道魂高」を人生の常にしているので、ブラックであろうがなかろうが、洋服から離れて仕事をすることは考えられませんでした。ブラック企業で働いて入院していたときも、「とりあえずここまで来たら、パタンナーで一人前になるしかない」と思っていたので、やめたいと思ったことはありませんでした。でも、入院していたときはやはりここぞとばかりに「今、休もう！」と思い、しっかり寝ていました。

質問2 仕事が不規則になることがあると思いますが、睡眠時間は何時間ぐらいとっているのでしょうか？

長谷川 今はなるべく7時間ぐらいは睡眠をとろうと思っています。30代で独立したときは、3～4時間睡眠が1年間続くこともありました。昨今の文献を読むと、ものすごく悪いパフォーマンスで仕事をしていた可能性もあります。時差だけのお話だと、ヨーロッパだと飛行機で12～15時間かかります。私はほっとくと10時間ぐらいい寝ているため、着いたら起きるみたいなイメージで時差ボケを感じないタイプです。先ほどご紹介した『シリコンバレー式 自分を変える最強の食事』、この中にも睡眠のパフォーマンスをちゃんと上げる方法などが書かれているので、参考にしながらパフォーマンスが落ちないように努力しています。

質問3 本日はとても有益なお話をありがとうございました。パターンの話でアメリカやフランス、それぞれの国でパターンの特徴が違うとおっしゃられていたのですが、服とかを見て「これ、アメリカ式だな」という感性をどうやって磨かれたのですか？

長谷川 感性的なものの見方というのはたぶんたくさんものを見るのがいいと思います。アメリカ式とヨーロッパ式という漠然としたもので代表的なものはシャツです。アメリカのものは、合理的にツクられていて、アメカジにあるような襟って、置いたときに襟が三角形に近くなります。畳まれて、重ねていても形が乱れない。それに対し

て襟ぐりが丸く、販売時にカラーというプラスチックの支えがついているのがヨーロッパ式です。古い資料として雑誌を使いました。その雑誌には、付録としてパターンが付いています。それを写して分析しました。また、「型ぬき」と言って「これと同じものをつくってください」という依頼があります。形を抜いているときに、「これはヨーロッパっぽい」とか、「これはアメリカっぽいな」というのが見えてきます。数をこなしていくと見えるというのが答えになります。もう1つ方法を挙げるなら、各国に学校がありますよね。学校って当たり前ですけど教科書を出しています。その教科書を資料として勉強するのも、ひとつ感性を磨く手段になるかなと思います。

質問4 睡眠がすごく大事とおっしゃっていましたが、普段の生活の中で、勉強の時間などのご自分の時間をどうやって作っていましたか？

長谷川 自分の時間の作り方ですが、これだけ「睡眠大事です」と言いながら矛盾しますが、私の場合はほとんど寝ないで勉強していました。パターンは、2時間やって5時間休んで続きをやるとなると、指の間からツクっていた時の感性がこぼれ落ちるようなところがあります。当時は、寝ないで一気にツクらないとでき上がらないと考えていました。ただ何度か失敗があります。夜中にテンションが違うまま、ありとあらゆるテクニックを入れて素晴らしいものをつくり、明日起きてからパターンに戻そうと1回寝ます。朝起きてから見ると、びっくりするぐらいかっこ悪いものができていて、もう1回やり直すことがあります。それなら早く寝て、頭がクリアな状態でやれば良かったと悔みます。だからこそ、反面教師として捉えていただき、ちゃんと寝てパフォーマンスがいい状態で学んでいただきたいと思います。

質問5 新しい環境に慣れるのが苦手で、新しい世界に飛び込む勇気がなかなか持てません。長谷川さんのように考えを切り替えられるのがすごいなと感じました。どうしたら強い心を持てますか？

長谷川 そんなに私も心は強くないです。強そうに見えますが、いじわるとかされると、「自分に悪いところがあるのかな」と考えてしまいます。それを断ち切るために、先ほどの『良心をもたない人たち』という本がすごく私には役立ちました。新しいところに飛び込む勇気は、たぶんみんな怖いと思いますが、やらないで後悔するよりは、やって後悔した方がいいと思います。私の仕事の場合は最終的に納期があり、追い込まれながらやらねばならない。責任感もたぶん強い方だと思います。しかし、

ある程度までやったら、「洋服ができなくても誰も死なない」と思うようにしています。どこかで自分に逃げ道を作っておくというのも大切なと思います。「失敗してもやり直しがきくんだったら、いいじゃないか」と自分を奮起させて、何か試してみてください。本の中には本当に答えが散らばっています。自分の身近なところでロールモデルが見つからない場合は、本（遠くの先生）に尋ねるのを隙間時間にやってみて、何かヒントが見つければと思います。ぜひトライしてみてください。

おわりに

「パタンナー」という仕事に真摯に向き合い、国内外で活躍する長谷川氏は、まさに在学生にとってロールモデルとなる方でした。卒業後も自らの専門性を高めるために「勉強」する時間を確保しながらも、「睡眠」の大切さを再認識する機会となりました。参加者からは、「自分について理解を深め、自分に合った職場で自分の人生を彩りあるものにしたいと感じました」や「バイタリティ溢れるお話にたくさん気づきをいただきました」などの感想が寄せられました。講演会を通して、皆さん自身が未来に羽ばたくヒントが見つければ幸いです。

謝辞

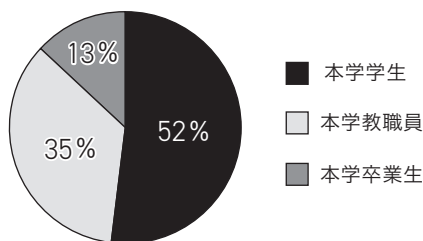
講演会を開催するにあたり、ヒューマンライフ支援機構飯塚堯介機構長にはお忙しいところ開会の挨拶をいただき、生活科学研究所職員の皆さまには当日の講演会運営をお手伝いいただきました。

また、オンライン配信だけでなく、突然の講演会広報用動画のDVD制作にも対応いただいた有限会社エムエージー様、すてきな写真をご撮影いただきましたカメラマンの梅沢香織様、株式会社 Craps 様と上毛印刷株式会社様にはポスター・チラシ制作と印刷でお世話になりました。

最後に講演会にご参加いただきました皆さま、そしてご協力いただいたすべての方に厚く御礼申し上げます。



Q1. 所属などを教えてください。

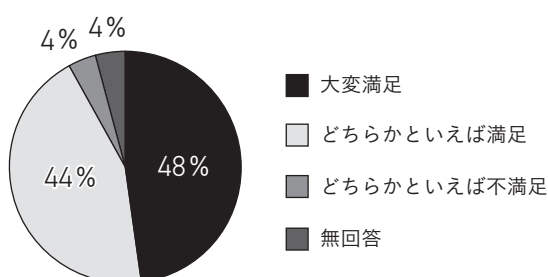


転職することや生きる上でのアドバイスもありとても参考になった。

服飾を学んでいる、そうでないに関わらず、睡眠を大切にすることの大切さややりたいことを突き詰める素晴らしさを学びました。

児童学科なので服飾のことについては詳しくなかったのですが、キャリアについてとても参考になりました。

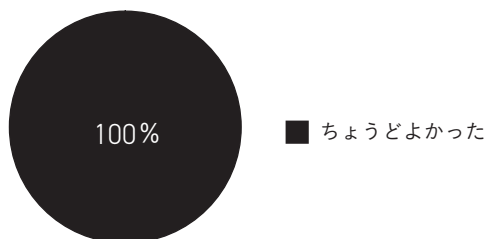
Q2. 講演の満足度を教えてください。



バイタリティ溢れるお話にたくさんの気づきをいただきました。パタンナーに限らず、今後のキャリア、人生を考えるより多くの学生にぜひ視聴してもらいたいと改めて感じました。

これから就職して社会に出ていく私たちにとって、これまで社会で努力されて奮闘されてきた方のお話はとてもためになるものでした。自分の強い意志を持ちながらも周りの人の流派も勉強するなど、自他の関係の取り方がしっかりされているからこそそのキャリアなのだと感じました。ありがとうございました。

Q3. 講演会の時間はいかがでしたか？



アパレルについて初めて知れました。

途中からの参加になってしまったが、とても良い講演会でした。もっと色々な学生さんにきいてほしいと思うほど素晴らしいものだったので是非 DVD とかにして配付してほしいです。

Q4. 講演会の感想をご記入ください。

アパレルの仕事といっても、デザインを考えたり生産したり、販売するなど以外にも沢山の知識や技能が求められると知った。洋服を売るといっても、沢山の細かい分岐があり、客の需要や歴史などを踏まえた人にしか素敵な商品を作ることはいないと感じた。

自分の所属学科とは違う職業の話を聞いてよかった。

自分の人生について考えるきっかけになりました。自分について理解を深め、自分に合った職場で自分の人生を彩りあるものにしたいと感じました。

専門的なお話もお伺いできたため、自分の今後にリンクさせ、活かしていきたいと感じました。

「誰かが必ず見ている」・・・人生で会う様々な人との関係性を大切にすることで「セレンディピティー」が起こり、人生が開ける。クランボルツの「計画的偶発性理論」にも通じており、私も大いに同感します。嫌な人間（ルサンチマンを持つ人）はやり過ごす（by ニーチェ）という考えも全く同感です。

『会社のルール男は「野球」で女は「ままごと」で仕事のオキテを学んだ』は読んではいけないのではないかな？ 読んだことのない本だが、タイトルから想像すると、古い男女観を補強するような内容のように感じます。今回の内容だとキャリア支援課との連携があつたらもっと参加者が増えていたのではないのでしょうか？

自分の可能性に真摯に向き合ってつき進んでいる見本と思われる方と思える。素敵な家政人です。

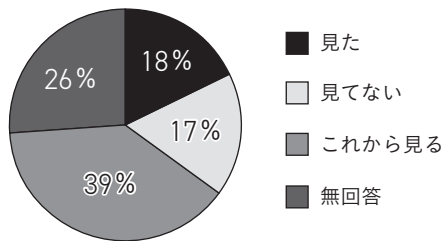
これからの女性の働き方として、とても参考になった。生き方として尊敬できる。

とても有意義な内容でした。長谷川さんの生き方に感動！しました。

とても興味深い話をありがとうございました！長谷川先生の人生を垣間見れて、共感できることも沢山ありましたし、久しぶりに頑張ろうと気持ちを高めることが出来ました。

現在、社会人として働く上で大切なことを改めて知ることができてよかったです。

Q5. (対面参加者対象) 三木ホールロビーの展示をご覧になりましたか？



Q6. 今後、当研究所で企画してほしい内容等がありましたら、教えてください。

保健センターと共催で婦人科系のおはなし
生理のはなし、女性のかかりやすい病気のはなし
生活習慣でどう改善できるか

トランスジェンダーに関する講演会

学生の中にあるアンコンシャス・バイアスに気づかせてくれるようなスピーカーをゲストに迎える必要があるのではないのでしょうか？専門的にフェミニズムを身に付けている人が求められている気がします。

東京家政大学 ヒューマンライフ支援機構 女性未来研究所主催 学修・教育開発委員会共催 FD・SD講演会 「LGBTQ+ (性的マイノリティ) を学ぶ」

当研究所では、昨今、女子大学のトランスジェンダーの女子学生の入学受け入れ等で話題となっている LGBTQ+ (性的マイノリティ) をテーマに令和5年度リサーチウィークス期間となる令和6年2月22日(木)に専門家の森山至貴氏と小西優実氏を講師に招き、本学教職員向け(本学学生も参加可能)の講演会を対面とオンラインのハイブリッドで開催しました。講演会当日はオンライン参加を含め、87名の教職員や学生が参加しました。

講演会終了後、オンデマンド配信の要望も多くあり、学内関係者のみに期間限定で講演会動画のオンデマンド配信を行い、多くの学内関係者に視聴いただきました。

ハイブリッド配信 東京家政大学 ヒューマンライフ支援機構 女性未来研究所主催 FD・SD講演会
学修・教育開発委員会共催

LGBTQ+ (性的マイノリティ) を学ぶ

近年、『LGBTQ+(性的マイノリティ)』についての理解や支援が社会全体で広がり始めています。本学にも性的マイノリティの学生や教職員が少なからず存在している現状から、当研究所では、『LGBTQ+(性的マイノリティ) 学生たちのために大学ができること』をテーマに講演会を開催します。もし、身近な人が当事者だったら、窓口や授業で学生から相談されたら、あなたは(はちゃん)と理解し、支援することはできますか?無意識に相手を傷つけないために、基礎知識を学び、他大学の事例や当事者たちが抱える課題から理解を深め、大学として取り組むべき課題と大学教職員としてこれからの学生支援を考えます。

2024年
2月22日(木)14:00~15:40
(開場:13:45)

会場:1-4B講義室/Zoomウェビナー
対象:本学教職員(本学学生も参加可能)
定員:対面50名・オンライン100名

講師:森山 至貴 氏
(もりやま のりたか)
早稲田大学 文学学術院 准教授

経歴
1982年生まれ。社会学者。東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻助教、早稲田大学文学学術院専任講師を経て、現在、同准教授。専門は、社会学、クィア・スタディーズ。著書に『LGBTを読みとく—クィア・スタディーズ入門』(筑摩書房)など。

講師:小西 優実 氏
(こにし ゆうみ)
東京大学大学院 総合文化研究科国際社会科学専攻 博士課程

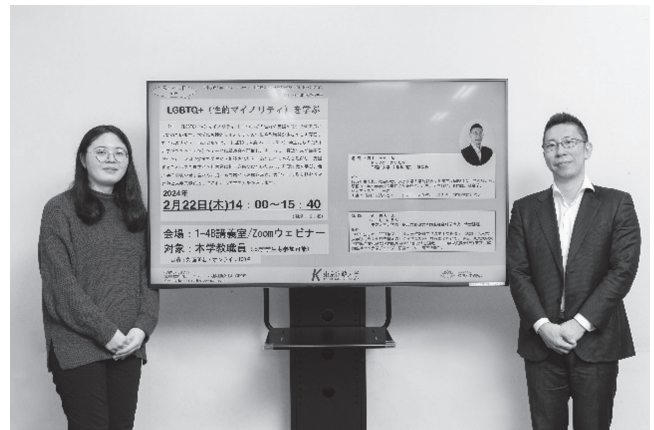
経歴
1981年生まれ。2021年東京工業大学情報理工学専攻修士課程修了。2023年東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻修士課程修了を経て、現在、東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程、日本学術振興会特別研究員DC、国際基督教大学ジェンダー研究センター研究助手。

<注意>
参加方法によって申込フォーム
および締切日が異なります。
お間違えまいようご注意ください。

対面参加
2024年2月19日(月)〆切

オンライン参加
2024年2月21日(水)〆切

※QRコードの読み出しはインターネット接続環境が必要です。
<お問い合わせ先>
東京家政大学ヒューマンライフ支援機構女性未来研究所
メール: jooei-sirai@kaiyodai.ac.jp



【講師紹介】(肩書は当時のもの)

森山 至貴 氏 早稲田大学 文学学術院 准教授

1982年生まれ。社会学者。東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻助教、早稲田大学文学学術院専任講師を経て、現在、同准教授。専門は、社会学、クィア・スタディーズ。著書に『LGBTを読みとく—クィア・スタディーズ入門』(筑摩書房)など。

小西 優実 氏 東京大学大学院 総合文化研究科国際社会科学専攻 博士課程

1997年生まれ。2021年東京工業大学情報理工学専攻修士課程修了、2023年東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻修士課程修了を経て、現在、東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程、日本学術振興会特別研究員DC、国際基督教大学ジェンダー研究センター研究助手。

大学では、性の多様性に関する基礎教養の授業を担当しているため、若干授業のようになってしまいますが、前半は非常に簡単に「性の多様性」の話を、後半は学生が抱える困難はどんなものを簡単に紹介し、その後、私が勤めている早稲田大学の話を少しいたします。

「性的指向」・「性自認・性同一性」と「LGBTQ+」

まず、「LGBTQ+」という言葉を使う前に、使えるようになってほしい言葉が2つあります。それは、「性的指向」と訳される「セクシュアル オリエンテーション (Sexual Orientation)」と「性自認」あるいは「性同一性」と訳される「ジェンダー・アイデンティティ (Gender Identity)」です。性の多様性といっても、人々の性のあり方は様々な観点から本当に多様であると言えますが、大学組織において必要な支援を整備する観点では「性的指向」や「性自認・性同一性」の2つの概念に関係する性のあり方についてきちんとフォローしていくことが必要だと言われています。「LGBT」というものを2つに分けると、「LGB」は「性的指向」に主に関連し、「T」は「性自認・性同一性」に主に関連して理解する性のあり方とも言えます。

「性的指向 (Sexual Orientation)」は、『自分がどの性別の人間に対して性的欲望や恋愛感情を感じるかに関する自己認識のこと』と授業では説明をしています。性的指向は必ずしも「異性」に向くとは限らないことをまずは理解してください。性的指向の対象の性別が同性、たとえば本人が男性で性的指向の対象が男性である人がいますよね。性的指向の多様性についてもきちんと配慮するのは、『学生が異性愛者である』ことや『恋愛が普通』というような前提条件を解除し、誰にとっても居心地の良い授業環境や議論の組み立てができるためには必要です。

次に「ジェンダー・アイデンティティ (Gender Identity)」は、「性自認」あるいは「性同一性」という2つの訳し方がありますが、元々は同じ単語のためどちらに訳しても意味は変わりません。『自分自身の性別に関する持続した自己認識』という意味です。また、自身の性別、性自認が男性と女性のどちらでもないという「ノンバイナリー (Non-Binary)」や「ジェンダークイア (Genderqueer)」という人もいます。その人の性自認を尊重することは、『どちらでもない性別で生きる』ことを尊重することになる場合もあると理解してください。性的指向や性自認・性同一性の多様性にきちんと目配り

した大学づくりはセクシュアルマイノリティの学生を支えるためには絶対に必要です。

最近では、「L = レズビアン」「G = ゲイ」「B = バイセクシュアル」「T = トランスジェンダー」の頭文字を合わせた「LGBT」という言葉でセクシュアルマイノリティ全般を指すのは適切ではないと認識されるようになり、「LGBTQ+」という言葉を使用することもあります。「Q」や「その他」という意味を含む「+」と付けることによって全てのセクシュアルマイノリティを包括して示す略語になっているわけです。「Q」は、「クイア (Queer)」と「クエスチョニング (Questioning)」という2つの言葉の頭文字です。「クイア (Queer)」は、『この世の中で『普通』とされていない (非規範的な) 性のあり方』と私は説明をしています。「LGBT」のどれでもない性のあり方を生きる人を呼ぶことがあります。「クエスチョニング (Questioning)」は、『自分の性のあり方を1つのラベルにあてはめない状態にある人』を呼びます。「+」という表記があることで、他人に対して恋愛感情や性的な欲求を抱かない「アセクシュアル (Asexual)」の人々などが含まれることとなります。

意識より前に知識を身に付ける

事前質問に「LGBTQ+ の方と接する時に、失礼な言動をとって傷つけてしまう、怒らせてしまうことを恐れてしまいます。どのような意識を持って接するのが良いのでしょうか？」といただきました。人によっては、「友好的」、「寛容の精神」、「思いやり」がその答えと思っているかもしれませんが、実はLGBTQ+ の学生や教職員にとっては、それらは大抵の場合何の足しにもなりません。たとえば、どんなに親愛の情を持っていても、侮蔑的なニュアンスの呼称を使ってしまう相手に対する加害行為になるのは当然です。「ゲイ」や「レズビアン」、「トランスジェンダー」といった適切な言葉遣いに関するものなど、『意識よりも前に知識』を持っていただきたいと思います。

「マジョリティ」にも名前がある

「セクシュアルマイノリティ」やそれ以外の「マイノリティ」に関して説明する時に「マイノリティ」の呼称をよく使いますが、「マイノリティとマジョリティが対等な立場である」ことをきちんと理解するために大切なのは、「マジョリティ」にも対応する名前があるのを忘

れないことです。「マジョリティ側にも適切な呼び名がある」ことを上手く掴んでいただき、ちゃんと両方を使うことが必要です。「LGBT」で、「Tはトランスジェンダーだな？」と理解した人は、『トランスジェンダー』ではない人は、『シスジェンダー（出生時に割り当てられた性別と性自認が一致している人）だ』と、揃って理解してほしいと思います。

当事者学生の抱える問題

授業やサークルなどの場でLGBTQ+ がないという想定での発言が多くあります。これは必ずしも大学の中だけではありませんが、「見た目による性別判断に晒される」ことがあります。例えば性自認は男性であるが、女性に見える格好で学生生活を送らざるを得ない学生に対して教員が「その人の女」「その女子」と指すことで、その人が自分の性自認（ジェンダー・アイデンティティ）を授業の中で否定されたと感じることがあります。また、カミングアウト^{注1}の難しさやアウトティング^{注2}の危険性でいえば、一橋大学大学院での事件を思い出される人もいるかと思いますが。差別語・侮辱語を用いたコミュニケーションを教員が止めてくれないことに学生は非常に強いストレスを感じています。その時に教員が「それは駄目だよ」と言ってくれない、という事例について、残念ながら早稲田大学の中でも何度も聞いたことがあります。

大学での体制について

早稲田大学では、全学的にダイバーシティ推進を行って



います。主に教職員向けで人事部所管の「ダイバーシティ推進室」、学生向けで学生部所管の「スチューデントダイバーシティセンター」の2つの組織による体制です。更に学生部が所管している、学生の性の多様性をフォローする「ジェンダー・セクシュアリティセンター（GSセンター）」という別組織があります。学生向けのサポートも行っています。教職員向けと学生向けにそれぞれ性の多様性に関するガイドラインを出しており、これを組み合わせることでダイバーシティ推進やLGBTQ+の学生、教職員のフォローを可能にしようと試みています。詳しくは、後半の対談にてお話しします。

注釈

注1…自らの性のあり方を他者に伝えること

注2…本人の同意なしに性的指向・性自認などを第三者に暴露すること

小西 優実 氏 講演

今回の講演会テーマに「女子大学のトランスジェンダーの女子学生の受け入れ」が1つのバックグラウンドとしてあると聞いています。それを含めて「トランス」に関して、基本的なトランスジェンダーに関する一般知識と、研究者としての知識を提供するかたちで話をさせていただきます。

トランスジェンダーと性別

トランスジェンダーについて説明するには、3つの性別について説明をしなくてはなりません。1つ目は、「割り当てられた性別」です。出生時に医師や社会によって

割り当てられた性別です。2つ目は、先ほど森山先生も紹介した「ジェンダー・アイデンティティ（性自認・性同一性）」です。必ずしも「割り当てられた性別」と一致するわけではありません。例えば割り当てられた性別が「女性」であることは、自分自身が常に絶対に女性と感じられている、実感できているということを意味しません。男性の可能性もあるし、それ以外の性別、Xジェンダー、中性、ノンバイナリーといった性別のありようを自分自身で感じている人もいます。3つ目が一番重要で、「ジェンダー様相（Gender Modality）」です。これは少し聞き慣れない言葉だと思いますので詳しく説明しますと、「割り当てられた性別」と「ジェンダー・ア

アイデンティティ」の関係性のことを「ジェンダー様相」と言い、「トランスジェンダー」というのは「ジェンダー様相」の1つの様相です。例えば「割り当てられた性別が女性」であり、「ジェンダー・アイデンティティが女性」の場合、この2つの性別が一致しているため「シスジェンダー」となります。逆にズレが生じた場合、「トランスジェンダー」となります。「割り当てられた性別」と「ジェンダー・アイデンティティ」という2つの性別が少なくともあり、その一致具合やズレ具合のことを「ジェンダー様相」と言います。「トランスジェンダー」というのは「ジェンダー様相」の1つであり、「シスジェンダー」も同時に「ジェンダー様相」の1つであるということが出来ます。

ジェンダー・アイデンティティと性役割の違い

「ジェンダー・アイデンティティ」の話をする、しばしば「それって何ですか？」という話が聞かれます。以前、講演した際も一番多かったのが「性役割と何が違うのか」という質問でした。これを理解する上でわかりやすいのは、日常会話でも聞かれる「女/男なんだから〇〇しなさい」（例：「女なんだから化粧しなさい」、「女なんだから男の人と結婚しなさい」、「女の人だからおしとやかにしなさい」など）と言う表現です。これを言われた側はムッとすることがあるでしょうし、差別的な発言にあたりうと思います。なぜならその発言にはいずれも、「女だから女らしく生きるべきである」という、「女らしさ」や「男らしさ」、すなわち性役割が押し付けられているからです。一方で、この表現には「あなたは女である」「あなたは男である」という性別そのものの押し付けも含まれています。先ほどの発言には、実は隠れた前提として「あなたは女だから（女らしく生きるべきだ）」という、その人の性別自体の決めつけが入っているわけです。トランスの人のお話を理解するには、「女らしさ」「男らしさ」というところの「らしさ」以前に、

そもそも自分の望まない性別として決めつけられることによって不利益や、場合によっては苦痛を生じることがあることを知る必要があります。「ジェンダー・アイデンティティと性役割は不可分だ」という話もありますが、重要なのは「女らしくというのが嫌だ」を超えて、そもそも「女である」「男である」という性別そのものの割り当てに対する違和感、ズレがポイントになっているのを理解することが重要です。

トランスジェンダーと性別移行

性別移行とは、「割り当てられた性別を変えていく」ことで英語では「トランジション (Transition)」と言います。性別移行には大雑把に分類すると3つの種類があります。1つ目は「社会的な移行」です。見た目や振る舞い、学校での扱われ方など、社会的な側面における移行がこれに当たります。2つ目は「医学的な移行」です。これは単純に言えば、医学的な意味で身体を変えていくことです。例えば、ホルモンを投与する人や、性器の手術をする人などがいます。よく新聞などで「性別適合手術をしなくても…」とありますが、「性別適合手術」は「性器の手術である」ことをポイントとして押さえておいてください。つまり、脱毛や胸部の手術など、他にも医学的に性別を変えるための手段はあります。3つ目は「書類上の移行」です。戸籍や身分証、学籍簿などの性別や名前を変えていくことです。このように社会的、医学的、書類上の移行と手段が多岐にわたるため、一日で変えることはできません。いずれの移行も時間がかかるプロセスであるため、トランスの人たちは少しずつゆっくりと性別移行していくことになります。

現代の日本における、トランスジェンダーの人々をめぐる状況

10年程前までは、「トランスジェンダー」の人々は、「性同一性障害の人」として日本社会で理解されてきました。「性同一性障害」という言葉は、1996年に埼玉医科大学によって使われたのをきっかけに、日本に広まりました。埼玉医科大学は、身体の性別違和を持つ人々に対して、ホルモン投与や手術などの医療を提供することが正当であるということを示すために、つまり、「性同一性障害」という人々がいて、その人たちの苦しみを緩和するために医学が手助けするのは正当である」ということを表すために、この言葉を用いていました。さらに、2000年代になるとメディアを通じて一般にも知られるようになり、2003年には一定の条件のもとで性別を変更することを可能にする「性同一性障害者の性別の取扱いの特例



に関する法律」（「特例法」）ができました。その後、2010年頃からは文部科学省が「性同一性障害」の人たちがいることをふまえて、教育現場において「性同一性障害」を持つ児童や生徒への個別的な支援の必要性を全国の学校に通知しました。

一方、「トランスジェンダー」という言葉は、日本では2012年頃から「LGBT」という言葉と共に急速にメディアで普及していきました。関連した大学の動きとして、著名なものとしては、2018年のお茶の水女子大学による、トランスジェンダーの女子学生（戸籍またはパスポート上男性であっても性自認は女性である人）に入学資格を広げたという発表があります。また立法、司法上の動きとしては、昨年6月23日に施行されたSOGI理解増進法や経済産業省のトランス女性に対する処遇への最高裁判決（7月11日）、特例法の不妊化要件の最高裁による違憲判断（10月25日）があります。これらの法律や判例の特徴として、いずれもジェンダー・アイデンティティの尊重、すなわち「性自認の尊重が重要」であり、「性自認に従った取り扱いを受けることが重要な

法的利益」であることが法律上でも共通認識とされていることが挙げられます。

学生が直面する具体的な問題について

トランスの人を巡る社会的な現状がある中で、大学で学生が直面するのは、大学の制度や性別分けされた施設（更衣室、トイレなど）や、健康診断だけではありません。教職員や学生にトランスについて、あるいはジェンダー・アイデンティティ・性的指向について全然理解してもらえず、異常視、あるいは特殊な人間のように扱われてしまうといった問題があります。また、親や家族との問題や自分の性自認・性的指向を安全に相談できる場所がなく、ロールモデルもないことが大学の制度・設備を超えた問題としてあります。この問題の解決例として、本人の通称名や性自認に即した書類発行、行動ガイドラインや啓発活動などがあります。国際基督教大学や東京大学のガイドラインは、対談にて適宜参照するという形にしたいと思います。

森山 至貴氏・小西 優実氏 対談

近年、女子大学のトランスジェンダーの女子学生受入れの発表もあり、トランスの当事者が大学に入学や編入した際に抱える問題や性的マイノリティの学生や教職員に対して大学としてどのように支援できるか、他大学の事例などを出していただきながら講師たちによる対談が行われました。

ガイドラインと主幹部署の必要性

森山：トランスの当事者が抱える問題について、大学ではどんな事例がありますか？

小西：まず、大学のどこに相談しに行けばいいのかわからないことです。

例えば、教務課に相談に行くと、部署が違うと言われ、色々な部署をたらい回しにされることがあります。その度に自分が当事者であることをカミングアウトせざるを得ないことに苦痛を感じる方は少なくないです。

森山：「相談がたらい回しにされる問題」は在学中でもありますが、入学前だと更に深刻かと思います。大学の特徴として、様々なアクターによる自治というものが重んじられていて、例えば大学全体、教員の裁量、学部な

どで決定できる裁量が分配されています。だからこそ、何か困った時に学生はどこに行けばルールがわかるのか、運用を変えてもらえるのか、いちいち学生自身が交渉や確認する必要があります。自治を確保するゆえに、トップダウンでなかなか細部を決められない難点があります。それを踏まえた上で対応するならば、学籍情報は教務担当、トイレなどの相談はどこにするかなどの情報を一覧化して提供することが可能だし、必要かと思います。早稲田大学では、『LGBTQ+学生とアライのためのサポートガイド』にこれらの情報が掲載してあります。入学前から相談することも可能です。

小西：トランスの学生にとって「スタートポイントがどこかわからない」、「窓口がどこかわからない」という不安があるため、情報が一覧になっていることはとても大事です。たぶん早稲田大学のガイドラインのほうが充実していると思いますし、本当は大学の部署がやるべきだと思うのですが、私が今所属している国際基督教大学では、ジェンダー研究センターが『できることガイド in ICU』を作成しています。「できること」というのは、「大学が学生のためにできることは何か」ということです。目次を見ると、「性別の取り扱い」、「健康診断」、「更衣室」、「留学」、「就職」などがあります。あるいは「トイレはど

こにあるの？」といった、基本的な情報を集約してあります。各大学でガイドラインを作り始めています。もし、きっかけとしてガイドライン作成をやるとしたら、想定できる施設・設備の課題について考えなければいけないと思います。

森山：ありがとうございます。LGBTQ+の学生に関して対応する時、どこが主幹部署になるかを考えなければなりません。多くの大学において、学生相談室か保健センターなどが主幹部署になることが多いと思います。LGBTQ+の学生の困りごとは心身の健康上の問題だけではないため、私は、必ずしも保健センターに置くのがベストだとは思いません。ただ、それぞれできることはバラバラですが、主幹部署がないと学生よりも教職員が情報をどこに集約していいのかわからず、事例をいくら積み重ねても集約されずフィードバックにつながりません。非常に重要なポイントとして、できれば研究所などの部署ではなく、大学側の組織の中に主幹部署を作ること考える必要があると思います。研究所だといつまで経っても組織のあり方にフィードバックできないことがあります。

女子大学だから 「性別欄」の問題は起こらない？

小西：また、性別ごとの統計で元の性別のまま出されてしまい、アウティングにつながる場合があります。これは教職員についても同様に起こりえる話です。あるいは、「氏名変更したが、反映にとても時間がかかり、学務システムに接続する度に違う名前が見えてしまう」というような問題があります。

森山：「女子大学は基本的にみんな女性って想定だから、性別欄の問題は起こらない」と思っている人は、教職員のことは考えていないと思います。教職員の性別情報が必要となる場合があります。例えば男性の教職員が多すぎるという問題を解決するため、などですね。今回の講演テーマからは学生に関することが主なトピックとなつてしましますが、教職員のことを考えると、必ずしも女子大学で性別統計の問題が起こらないとは限りません。

問題が起こる度にサバイバルゲームが始まる

小西：その他にメールアドレスなどのシステム統一や定期券購入の際に対応できておらず、前の戸籍上の氏名と性別が表示されることがあります。また、サークル活動などでは当然、セクシュアルマイノリティと人には言っ



ていないため、宿泊行事の時などに突然トラブルになる可能性があります。このように何か問題が起こる度に、当事者にとっては「サバイバルゲームが始まる」ように感じるのではないのでしょうか。

森山：大学の活動で難しいのは、「すべてを教職員がコントロールしているわけではない」という点です。とりわけ女子大学で起こる可能性があるのは、課外活動における「インカレサークルで問題が起きた時に、何も手が出せない」ことです。問題が起きた時に大学がどこまで手を広げて助けてやれるのかは難しい問題だと思います。これはどの大学でもどんな場合でも起こりますが、LGBTQ+の学生の場合も同じで、それは結構しんどいなと思いました。

在学中、卒業後の性別移行の時に起きること

森山：トランスの人々の中には在学中に性別移行をしていく人もいて、そのことに固有の困難というのもあるはずですが、それについて何か研究者として知っていることを教えてください。

小西：まず、概論として大学という場所が、学生にとって初めてある程度自活できる場となる人も多いです。つまり、それまでずっと親元で生活していて、大学生になりバイトを始めたり、もう少し社会が広がったり、そういう場所になっていくことが多いということです。あるいは小中高では性の多様性について勉強できる環境がなく、大学に入って初めて知ったことで自分の違和感が言語化されることもあり得ます。スタートポイントとして大学は「自分のあり方がどうだろう」を育てていく場所でもあります。つまり、大学に入る時点でどのように生きるか、大学に対してどのようなニーズがあるのかを学生が具体的に決めているとは限らないということです。例えば入学時は女子学生として入学したが、授業やサー

クルで情報を得て勉強していく中で自分の違和感が言語化されていき、「ノンバイナリー」や男性として生きていく、といったケースについて色々と困難があると考えられます。「ノンバイナリー」だと、それほど見た目を変えることは多くないため、誰にも気づかれずにひたすら女性として扱われ続けることに息苦しさを覚える人もいますと聞きます。男性として生きるトランスの人々の中には、「女子大学」の中では自分のアイデンティティを育むのに様々な障害があることや、就職活動や社会に出た後に「女子大学」出身であることを公表できず、経歴が足枷になることがあると聞きます。

森山：大学在学に学生本人のトランジション期間が重なったり重ならなかったりするかによって、学生が抱えるトラブルの質が変わってくるはずですが、先ほど、トランスの学生が抱える問題で「サバイバルゲーム」とありましたが、「戸籍上の性別がバラされる」という恐怖やリスクが突如発生すると思います。在学中に性別移行をしていく人だとそのサポートや友人関係が変わっていくこと、あるいは授業中の教員の接し方がトラブルの種になりうるものがまた別の問題としてあると思いついて聞いていました。

他大学のガイドラインを読み込む

森山：いくつかの事例を踏まえた上で、「大学には何ができるのか」という話をできればと思いますが、小西先生がお持ちになった資料をご紹介しますので、ぜひ詳しく見ていただきたいです。東京大学は、学生が主体にな

小西：そうですね、タイムリーなトピックですが、ちょうど2月6日に『東京大学における性的指向と性自認の多様性に関する学生のための行動ガイドライン』がようやくできました。検索すれば出てきますので、ぜひ詳しく見ていただきたいです。東京大学は、学生が主体にな



って運動していき、システムを徐々に変えてきたという経緯があります。そうした中で2年前くらいに「ダイバーシティ部門」が創設され、管轄する支援センターや、KOSS（駒場キャンパス）やKYOSS（教育学部）と呼ばれる「セイファー・スペース」ができ、本年になりようやく大学も統一した指針を出すことになったわけです。このガイドラインは、基本的な用語説明に加えて、「大学の基本理念」にもとづいて考える上で、大学生生活で直面する典型的な障害の例が書いてあります。とても粒度の高い、まさに当事者の人たちがずっと訴えてきたことをちゃんと言語化して、丁寧にまとめています。これをまず読んでいただければと思います。例えば、教員だったら名前でも勝手に性別を推測したり、グループ分けする、というわかりやすいケースはもちろん、あるいは授業の中で「男と女しかいない」ということを「そうではない」と知っていながらも、それを少し揶揄するような言い方にも色々問題があることなど、かなり網羅的に説明されています。それを踏まえた上で、何ができるのか、書類の分け方や想定される困難などがまとめられています。宿舎、トイレ、学生生活、サークル、就職、カミングアウトや相談窓口についても掲載されています。

森山：このガイドラインが出た時、私は「よくこんなに踏み込んで書けたな」と思いました。「世の中の的にLGBTQって大事だよ」というメッセージを庄のようなものとして受け取り、だからこそそれを軽いものとしてみなしたいと思うってしまう教員の発言、あるいは「世の中の的にそうだろうね」と自分から遠ざけたりするような後ろ向きとか揶揄的な発言に対して、ちゃんと絆創膏が当てられていて、この踏み込んだガイドラインは素晴らしいなと思って見ていました。

小西：事前質問に「東京家政大学でトランスの学生を受け入れるとしたら、偏見や差別をせずに相手を理解するにはどうしたらいいですか？」や、オンラインからの質問に「差別や偏見をせずに相手を理解するためにはどうしたらいいですか？」とありました。これに関連するガイドラインの内容として、私が個人的に一番好きなのが「おわりに」のところ。「結局は人に対して、また人について、何も言えなくなるのではないかと、何も言わなければいいのではないかと」という「守り」の姿勢に入る可能性が想定されます。しかし、「誰でもが「無意識的な偏見」(アンコンシャス・バイアス)にとらわれています」。「自分に閉じこもることなく、人とのコミュニケーションにみずからを開くという態度は、自分が無自覚的にいっている「無意識的な偏見」を自覚化し、みずからの心の構えを相対化する意味でも必要なことで



す」とまとめとして書いてあります。これはオンラインの質問や事前質問に対して結構響いてくると思います。つまり、「偏見がある、それをなくそう」と思っている、「無意識的な偏見」が自分の中にはあり、出てしまうことがあります。わからないから「何も言わない」のではなく、率直に話した上でその時に指摘してくれる人や疑念を抱く人がいたら、「無意識的な偏見」をちゃんと直す必要がありますし、自分自身で点検し続けることが重要です。そのためには、森山先生がおっしゃってくださったように基本的な知識が必要となるため、それもまた重要な心構えになると思います。

森山：ありがとうございます。ここに来てくださっている方は非常に関心が高いと思いますが、特に、関心の薄い教職員であっても性の多様性に関する発言の際に必要な配慮や対応の基本について、教職員向けのガイドラインを紹介します。早稲田大学では学生向け、教職員向け2つのガイドラインがあります。対応ガイドは何版も改訂をしていて、「こういうものを全体に出せばいいよ」というのを1つご提案したいと思います。これは別に私が作ったわけではなく、とても優れた職員によって作られましたが、この対応ガイドが2つの大きな困難を乗り越えていることを紹介したいです。1つは「ちゃんとやろうと思うと長文になる」点です。見開きで4ページ以内に短く収められたのは、数年間の苦闘の結晶です。ここ

まで簡潔にまとめられるという一つの達成事例としてぜひ読んでいただければと思います。もう1つは、「配慮・対応ガイド」がどうしても「禁止リスト」のようになってしまう点です。「こうしたら学生は安心できました」といった優れた取り組み事例を少しでも挙げないと、教員も困ってしまい、「何を参考にしたらいいかわからない」という意見があるんですね。このガイドラインはかなりがんばって「禁止リスト」にならぬよう心を砕いています。その2点を踏まえてガイドラインを、紙1枚で構いませんので作成し、毎学期ごとに配布することができると、思っている以上に需要があり、教員にとってはとても役立つと思います。ご参考にしていただければと思います。

小西：ガイドラインだけでなく、研修ビデオや研修会というのも方向性としてもありだと思います。国際基督教大学は2022年9月から学生向けのガイドラインビデオを出しています。また、2024年度から教職員向けのガイドラインや「性的指向・性自認(SOGI)」の研修と「ハラスメント」をテーマにビデオを作り、全員の視聴を義務付ける予定です。私もビデオの監修に携わっています。このようにガイドライン以外の方法もあります。全員に研修としてビデオ視聴を義務付けることによって、より実効性のあるものにしていくのは1つの方向性として考えられます。

森山：早稲田大学の文学部・文化構想学部では「授業の中に入れる」ことに成功しています。学部の1年生が履修する「基礎演習」という必修の授業の中に、「人権編」を組み込み、セクシュアルマイノリティや障がい、多様な人種の民族的ルーツを持つ人を理解するための資料を提供した上で教員がそれを使って自由に授業できるというかたちをとっています。各学部でそれが可能なのであれば、そういう手もあるかなと思います。特に学生さんをエンパワーしたり、「この大学ではこういうことを相談してもいい」と思えたりする情報提供の意味でも、授業に入れることは有効です。それぞれの持ち場で考えていただければと思います。

質疑応答

質疑応答の時間では、講演・対談を通して対面とオンラインの参加者からの質問や事前質問にお答えいただきました。

質問1：性別欄について、基本的に性別の欄はないほうがいいとお考えでしょうか？

または、性別欄がある場合、どのような選択肢が必要か、または自由記述がいいのか教えていただけますでしょうか？

森山：性別欄に関して、必要な場合があるため全廃することは当然できません。くわえて、学生生活に関わる性別欄であれば、その人の性自認を聞くべきだと思いますし、文科省に提出する際に、「戸籍上の性別で出して

ください」と言われているのであれば、戸籍上の性別に関する情報を取得しなければいけないと思います。「その性別は、どの性別ですか？」と、その都度、合理的に判断しながら性別欄というものを作る必要があります。場合によっては、学生や受験生にそれを聞くことも必要となります。それでも私や小西先生が何となく思っているのは、「大学の中で必要がない時に性別を聞きすぎ」という体感です。「別に今いらないでしょう」という時に聞くことが多いです。ですので、「出席簿からは性別欄は廃止しよう」といったことは私の大学でもやっていますし、必要です。全部止めるか、全部統一してやるよりは、基本的には問わないということにして、必要な時に合理性を示しながら必要な欄を作っていくやり方しかないかなと思います。

小西：ちなみに国際基督教大学では基本的に性別欄はありません。出願時に統計の際に使う自己申告の性別と、保健センター、ヘルスケアセンターに説明するために住民記載事項証明を提出するだけで、それ以外の学籍上の性別欄はないです。そのぐらいまで減らせるということです。

質問2：トイレの話についてお聞きしたいのですが、トランスの方は基本的に性自認しているトイレを使用したいのか、それとも「誰でもトイレ」のようなものを使いたいのでしょうか？

小西：これは人によるとしか言えません。例えば、TOTOさんが行ったアンケート調査^{注3}では、「他者の視線を気にせず自由に選べる場合」であっても、自分のアイデンティティに即した性別のトイレを利用したい人も、割り当てられた性別のトイレを利用したいと思う人も、オールジェンダートイレや多目的トイレを利用したいという人も一定の割合でいるとされています。ましては実社会においては、自分の社会的な性別のありように即して無難なトイレを使うことが実情だと思います。本当に人によると思いますが、「あれっ」と思うような瞬間はあるかもしれません。他にも性別移行中、あるいは一時的に女装や男装しているだけで使う人もいますので、ビックリすることもあるかもしれません。それでも「用を足す」という目的に沿って使うぶんにはそれでもいいのかなと思います。不審な行動をしていたら怪しめばいいのですし、通報すればいいのであって、用を足すことは別に犯罪でも何でもないです。答えになっているかわかりませんが、トイレに関しては実際のところこんな感じだと思います。

森山：女子大学でトイレを設置すると、「学生は基本女性でしょ」が前提だと、学生が「誰でもトイレ」に入る



といったことが、何か情報開示してしまう不安はあると思います。例えば、実はトランスの男性として生きていると思っている人が「もう女子トイレじゃないな」と思い、「誰でもトイレ」に入ることが起こると、「なぜ、あの人はあっちに入るのかな？」といったこととなります。その場合、「誰でもトイレ」が本当に誰でも入れるようになっているかという運用は気にしたほうが良いです。大学のやり方や場所、どこに設置するのかにも関わると思います。小西先生が「本人にフィットするほうに入っています」、「本人がその時々で状況で入っています」と言ってくさいましたが、同時にトイレ使用に関して困難を感じる人・場合も当然存在します。例えば、女性の学生用トイレがあつて、それ以外に誰でも入れるトイレがあつて、「誰でも」が本当に安心してみんなが入れるようになるにはどうしたらいいのか。地道に考える必要があります。

質問3：ガイドラインを作るとしたら、主管の部署だけでなく専門分野の方が入ったほうが当事者に寄り添ったものを作れるのでしょうか？

森山：たぶんLGBTQ+に関してだけではありませんが、主管部署だけでなく専門分野の方が入るべきだと思います。例えば主管は学生相談室ですが、保健センターの人に「これで合っていますか？」とチェックしてもらうと良いです。私も自分の大学の中で対応ガイドを作る際は「これで大丈夫ですか？専門家の意見が聞きたいです」と言われて、職員から聞き取りがありました。職員の層が厚いため、現在は全然私に相談せずブラッシュアップされていく状態に入っています。少し信じがたいほど恵まれた大学であるという自覚もあるので、基本的には学内に専門の先生が居たら、借りられる手を借りる、あるいは非常勤で来ている先生に場合によっては相談することが必要かもしれないと思います。使える人的なりソースは使うほうが良いものになると思います。ガイドライ

ンを作ること自体が、実際に問題が起きた際や運用した時に「ここと話をすればいいんだ」という地ならしにもなります。ぜひ、色んな部署を巻き込んで作っていただきたいと思いました。

質問 4：LGBTQ+ について少ない知識ながらも、それに対しての差別や偏見をなくしていかねば、と意識をしているが、その一方で、もし自分の身近にマイノリティな方がいた時に自分自身は驚いてしまうと思うし、違う目線で見てしまうと思う。もしこれも差別というのであれば差別は一生なくならないと思う。自分自身は今後どのような考え方にシフトしていけばいいのか教えてほしい。

小西：先ほど、東大のガイドラインのところで言ったように差別的な態度というのはどうしても出てしまうものです。自分にとってわからないものが入ってきた時、ビクッとしてしまうのは当然だと思うので、そこを否定せずに常に自分自身の知識をアップデートしながら点検するとともに、言われた時に硬直するのではなく、理解して自分自身を反省していけばいいかと思っています。

森山：もう1点、私から付け加えたいことがあります。ご質問に書かれている通りに読むと、この発言には「今のところ、自分の身近にはマイノリティの人はいない」という前提があると思います。「いないのではなく、私には言えないのかも」と少し反省というか顧みる必要があります。もちろんセクシュアルマイノリティは、「自分はセクシュアルマイノリティです」といつも言っているのではなく、「この人には言わないほうがいいかな」という場合には言いません。「自分はセクシュアルマイノリティなのだ」と言ってもらえるような雰囲気を自分には人に出せているのかなと少し自問していただくことがもしかしたら必要なかと思いました。

質問 5：組織体制では、「LGBTQ+」だけを取り上げるのではなく、「ダイバーシティ」という枠組みの中で作っていくほうがいいと思っています。組織化のプロセスとして、最初から「ダイバーシティ」と大きく構えて、その中に性的マイノリティや障がい、移民など色んなタイプを入れたのでしょうか？法的な関係もあり、そこからプロセスとしてできていく中で「ダイバーシティ」になっていくのか、その辺りはどういうふうにしたのか教えていただけますでしょうか。

森山：早稲田大学の場合、ちゃんと覚えてはいませんが、別々にあったのを改組によって1つの部門に統合した

と思います。少なくとも早稲田大学は障がい学生の支援は別にあつたと思います。障がいのある方への合理的な配慮は2024年度から大学も義務化になりますよね。先に障がい学生支援の組織が作られ、その後統合するしか今の段階ではプロセスとしてはありえない大学も多いかなと思います。早稲田大学は伝統的に中国からの留学生が多いため、留学生支援が必要であつたという大学事情もあり、それぞれ別々に動いていた部署が統合したのではないかと思います。

質問 6：LGBT 関係の書籍やドラマなどの中で当事者を理解するためにお勧めのものはありますか？

小西：私がさつき森山先生とお話していたのは、NHKの「作りたい女と食べたい女」^{注4}というドラマです。

森山：もう毎晩楽しみです。

小西：あれ見ている時、私、ずっと叫んでいます。

森山：わかります。

小西：あとは、Netflix 限定配信ですが、「トランスジェンダーとハリウッド」^{注5}という、ハリウッドという映画産業がトランスの表象をどのように差別的で全然理解のない偏見に基づいたステレオタイプを生み出してきたか歴史的、批判的に見ていく107分くらいのドキュメンタリーです。「色んなドラマを見ましょう」というものですが、そのドラマの表象がどんな前提に基づいているのかを理解する視点も必要だと思います。今のNetflixの「トランスジェンダーとハリウッド」はメディアとトランスというテーマに限定してお勧めすることが多いです。



森山：ありがとうございます。本を1冊ご紹介しようと思います。石田仁さんが書いた『はじめて学ぶLGBT 基礎からトレンドまで』です。これはたいへん良い本なので、これを読んでいただきたいと思いました。

小西：トランスに関しては若干古いです。

森山：トランスの話は確かにそうですね。これともう1冊併せてトランスに関して読んでもらったら何かありますか？

小西：昨年、出版された高井ゆと里さんと周司あきらさんの共著『トランスジェンダー入門』ですかね。

森山：講演の際に引用もされていましたね。『はじめて学ぶLGBT 基礎からトレンドまで』と『トランスジェンダー入門』を2冊併せて読んでいただくといいかと思います。図らずも解説書のようなものを挙げましたが、具体的なドラマや書籍を見て、当事者についてわかったと思うのは結構危険です。当事者にも色々いますし、小説だと特定のパーソナリティを持った当事者しか書けないはずなので。とてもたくさん読んだり見たりすれば、「少ない事例を知っただけで当事者を理解するとか言ってはいけない」や「枠組みにはめて理解してはいけない」というところまでたどり着くと思います。そういう意味ではたくさん見て、読んでいただくというのも必要だと思います。最初に読んでいただくなら、安心感のある解説書のようなもの、今言った2冊などを読んでいただけるといいのかと思います。

おわりに

講師を務めた森山氏や小西氏から語られたことから、「身近なところに当事者はいない」や「本学（女子大学）には性的マイノリティなんていない」と自分自身に「無意識の偏見や思い込み」があったとハッとされた方もいたでしょう。講演会の感想では、「LGBTQ+ について

大体理解していると思っていたが知識が足りなかった」、「無自覚に相手を傷つけることの怖さ、知識の大切さを再認識した」などがありました。近年、性的マイノリティや女子大学のトランスジェンダーの女子学生受け入れなど話題性のあるテーマであったため、後日行った学内関係者限定のオンデマンド配信でも多くの方が視聴し、知識を学び理解を深め、自分自身意識改革につながるきっかけとなりました。お忙しいところ講師を引き受けていただきました森山至貴氏、小西優実氏、本当にありがとうございました。講演会後のアンケートでは、続編を望む声を多くいただき、来年度以降も講演会企画ができれば幸いに存じます。

謝辞

講演会開催にあたり、学修・教育開発委員会に共催いただきました。オンライン配信では、有限会社エムエージー様に前日から配信準備をしていただき、講演会当日は、講師の先生方のやる気もアップするような綺麗で見やすい映像とクリアな音声を会場とオンライン配信にてお届けできました。報告書作成では文字起こしと校正に上毛印刷株式会社様、写真はカメラマンの梅沢様に撮影いただきました。最後に講演会にご参加いただきました皆さま、そしてご協力いただいた全ての方に厚く御礼申し上げます。

注釈

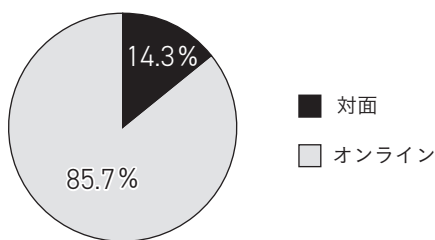
注3…TOTO株式会社2019年1月15日ニュースリリース「性的マイノリティのトイレ利用に関するアンケート調査」結果公表外先トイレでトランスジェンダーの感じるストレス「トイレに入る際の周囲の視線」が最多の31.1%

注4…漫画『作りたい女と食べたい女』（ゆざきさかおみ）を原作にドラマ化。2022年放送にシーズン1（第1～10回）、2024年1月からシーズン2（第11～30回）が放送された

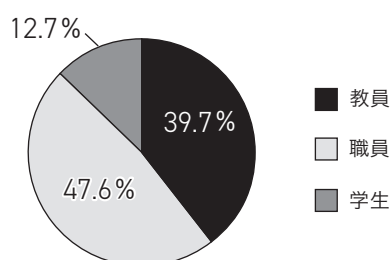
注5…Netflix限定の「トランスジェンダーとハリウッド：過去、現在、そして」ドキュメンタリー映像（2024年3月現在）

「LGBTQ+（性的マイノリティ）を学ぶ」アンケート集計結果 回答数：63

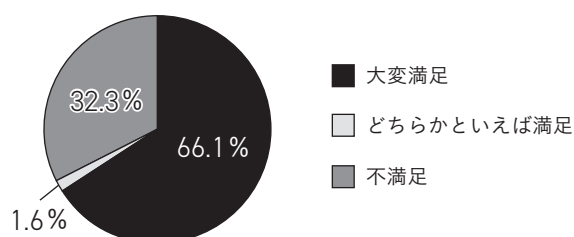
Q1. 参加方法を教えてください。



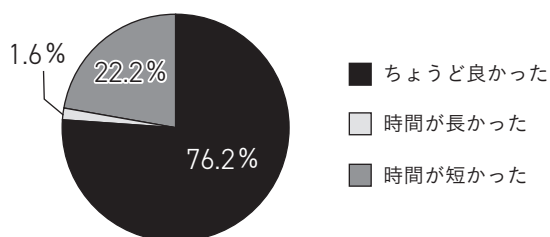
Q2. 職業を教えてください。



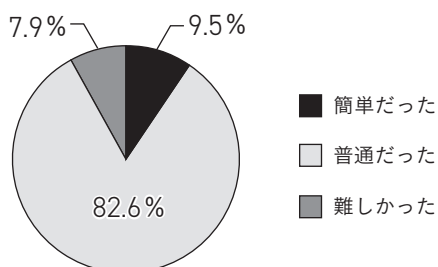
Q3. 講演の満足度を教えてください。



Q4. 講演会の時間はいかがでしたか？



Q5. 講演内容の難易度はいかがでしたか？



Q6. 講演会の感想をご記入ください。（一部抜粋）

女子大での生活が長く特に認識が無かったのですが、本日のご講演を伺って、LGBTQ+について勉強になりました。

LGBTQ+について、知識として知っていてもなかなか当事者学生として困ることをお聞きすることはないので、大変勉強になりました。シスジェンダーという言葉についても、今後使っていきたいと思います。

色々考えさせられました。ご時世としてそうやってきているのがすごく分かりました。それに伴い今後のトランスジェンダーの方の直面する問題なども分かり、難しい世の中になったなと感じます。

とても勉強になりました。講師のお二人の所属大学の対応を見て、本学が遅れていることを改めて認識しました。

LGBTQ+に対して幅広い知識を知ることができてよかったです。私は性的マジョリティの人間なので、このような配慮が世の中に存在するのか、と驚きました。色々考えさせられる講演会でした。

LGBTQ+について、臆げな理解しかありませんでしたが、大変参考になりました。女子大学として本学がどのような対応を整備していくのか、現実的な諸問題に取り組んでいただければと思います。

最初の15分を聞きそびれたので、残念です。もっと実践的な経験談などをふまえてお話いただければよかったですと感じました。対応については、他大学でも積極的に取り組んでいるのでそのガイドラインが使えるにはとてもありがたいです。

今まで曖昧に理解していたことが多かったとわかり、学び続けていく姿勢が必要だと感じました。とても良い機会になりました。ありがとうございました。

講演者の語り口がとてもソフトで聞きやすく、また分かりやすかった。さらに専門家であり当事者でもある講演者の話はリアルで聞き手にも訴える内容であった。

自分も無意識に偏見を持っていたということに気づかせていただきました。また知識をつけることの重要性も感

じました。本日をきっかけに、学生も教職員も過ごしやすい大学になっていくために自分には何ができるか、まずは日々の職務から意識を変えていきたいと思いました。

東京家政大学も早急に取り組んでいかなければならない課題の一つとして、本日の講演会は貴重なものでした。後日、全教職員が視聴できるように配信をお願い致します。

無自覚に相手を気付つけることの怖さ、知識の大切さを再認識しました。学生のレポートに「私はLGBTなので」との記述があったことがあり、当時は「なぜ、このレポートで書いたのかな」と疑問に思うだけでしたが、何か手助けして欲しいことがあったのかもしれないと思うと、当時の自分の無知が悔やまれます。

理解しやすかったと思います。LGBTQ+の基本的な知識を得る目的だったと思いますが、一歩進んで、海外での取り組みやSOGIについての教育の現状や課題についてお聞きかせいただければと感じました。

具体的な例を多く紹介してくださり、大変わかりやすかったです。定期的に情報をアップデートしていく必要があることを改めて感じました。資料もたくさん共有していただきありがとうございました。オンラインの画面もとても見やすかったです。

大変勉強になりました。トランス女性受け入れもですが、そもそも女子大ということでシス女性の学生しかいないという思い込みがあるように思います。しかし、入学後に性自認が変わることもあり、その場合は共学大学以上に学生が辛い状況になっているのではないかと思います。今日から改めて意識していきたいと思いました。ありがとうございました。

LGBTは聞いたことがあったが具体的な知識が不足していた。知識がゼロであっても、森山先生のご説明は大変わかりやすかった。また、小西先生の事例紹介では「サバイバルが始まる」という表現が、当事者ではない自分にも困難さを理解することができた。今回は大変貴重な機会だった。

LGBTQ+について理解が深まったと思うと同時に、さらなる理解のための勉強が必要だと思いました。早稲田大の取り組みや東大のガイドライン、その他の大学等の取り組みなどを参考にしつつ、本学でも、女子大特有の問題も含めた具体的な対応が必要と考えます。

本日の講演の目的がLGBTQ+の基本的理解にあったことから一般的な知識の解説に終始したように思います。できれば、第二弾の企画として大学内でLGTQ+の学生への具体的な支援システムに関するお話を両先生から伺いたいと思いました。また、フロアからの質問にございましたSOGIについてもLGBTQ+との関係性の中で東京家政大学で組織的に対応する必要があるのか、個人の問題に帰すのか、SOGIに派生するトラブルが生じた場合はどのように対応するのか等、お話を伺いたいと思いました。

Q5の難易度と関連して、話は分かりやすく理解が深まったが、テーマ自体が簡単ではないため（反省する、想像力を働かせる、よりよい方法を考え続ける、など、頭を使うことがいっぱいという意味で）、「難しかった」とした。相手のあることだが、まずは自分でできることとして、知識を持つようにしたい。

自分は今までLGBTの当事者に出会ったことは無い、と考えていたけれど、認知していないだけで会っているかもしれない、もしくは打ち明けられていない、という考え方もできるのだと気付かされました。私自身、LGBTに対して差別的な意識は持っていないけれど、普段の生活の中で気付いていないだけで、当事者の方を傷つける発言をしてしまっていたのではないかと省みる機会になりました。

先生方のお話や他大学の取り組み、当事者の方のご経験、質問へのご回答も含めて大変勉強になりました。自分自身も無自覚な偏見がある事を自覚して、知識のアップデートに努めたいと思います。

このような講演会を企画していただきありがとうございました。1点だけ、先生方の資料について、できればウェブ参加者にも事前に配布していただけたらありがたかったです。ご検討をよろしくお願いします。

実際に自身のセクシャルについて考えるきっかけになりました。自分がマジョリティ・マイノリティだからどうという訳ではなく、私自身の恋愛的思考はどのようなのか、自身の性別をどう認識しているのかを改めて考え受け入れていくことで、他の方のセクシャルについてもポジティブな感情を持ち、より良い関係を築いていけるのではないかと感じました。

小西先生のトランスジェンダーに対する具体的なお話と、森山先生の対応方法や考え方のお話で複雑に考えていたLGBTQ+についての知識をもう少し噛み砕いて理解できるようになりました。

東大や早稲田では既に行っていることを、家政大では行

えているのか、少なくとも職員には情報が共有されていないと感じるので、時代にそくした“学生ファースト”の大学を目指すべく、こうした問題にも真摯に取り組んでいかねばならない、と感じました。

大学の全職員に聞いてほしかったです。また、授業のなかで一年次の必修のなかに組み込むなど当事者だけでなく家族、地域、教育機関、企業や職場、全てにおいて理解が進み環境が変わっていかないことには、当事者の方の苦しみは癒えないと思います。

また、ショッキングなことですが自傷行為や自殺の割合が性的マジョリティーの人たちに比べて高いという調査結果もあります。10代、20代という年代はアイデンティティー確立の年代、社会に出ていく手前の不安も高まることから、制度や設備だけにとどまらず当事者の抱えるメンタルの悩み事についても大学として取り組む必要があるのだと思っています。

学生向けの組織と教員向けの組織に分割する体制やガイドラインを作る取り組みは、この大学にも必要だと感じました。自分の中には、無意識の偏見があることを前提に、知識の点検をし続ける大切さを感じました。この度は、貴重なお話を下さりありがとうございました。

Q7. 今後、当研究所で企画してほしい内容等がありましたら、教えてください。

同性愛者に焦点を当てた講演を聞いてみたいです。

介護関連に内容をお聞きしたいです。

学生の、自身が社会人として生きていくイメージはどのようなものであるのか、女子大学として何か特性があるのかどうか、資格取得の学科とそうではない学科における差異があるのか等々、東京家政大学の将来を探る上でも把握しておきたい課題ですので、それについての調査研究はいかがでしょうか。

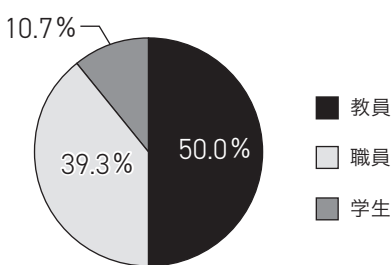
続編を希望します。

「女性未来研究所」ということですので、社会の最前線で活躍している女性のイノベーターの方の講演を企画していただければ幸いです。

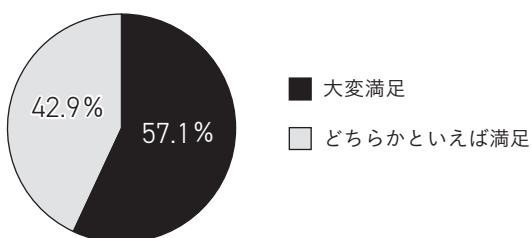
家族、出産、母子関係など。

【オンデマンド配信】「LGBTQ+（性的マイノリティ）を学ぶ」アンケート集計結果 回答数：56

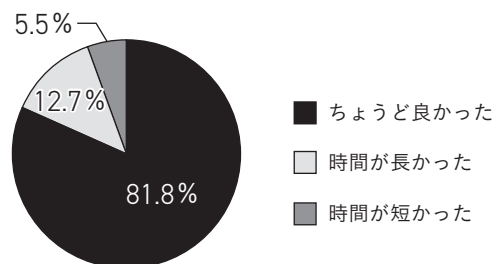
Q1. 職業を教えてください。



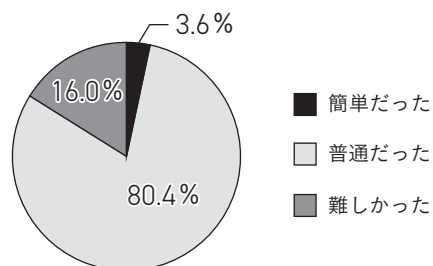
Q2. 講演の満足度を教えてください。



Q3. 講演会の時間はいかがでしたか？



Q4. 講演内容の難易度はいかがでしたか？



Q5. 講演会の感想をご記入ください。(一部抜粋)

Q プラスのありかたを教えてくださいました。学生と向き合いにおいては属性を超え、大きな将来への目標に導くというミッションを改めて感じました。主でも客でもない、かといってインクルーシブでもない、一人格に向き合う、中庸な姿勢が教師に求められると感じました。

Tについては詳しく学べる良い機会であったと思います。大学がこれからどのような行動を起こしていくのか大変興味深く感じました。しかし、講演のタイトルにあるようにLGBTQ+についてであれば、とても偏りのある内容であったなと感じました。

用語のみしか知らないことも分かりやすく説明していただきました。

臨床実習などの実習地についてもどのように理解を深めていくかも大きな問題であると思いました。まだどのような対応がよいのかをもっと知識を増やしていかなければいけないと痛感いたしました。

当日参加ができなかったため、後日動画と資料を拝見させていただきました。このようなテーマで講演会が開かれることはとても良いと思います。

講演のなかに、最初の窓口をどこに相談したらよいかわからない、というのがありましたが、家政大でもそのあたりの整備が必要ではないでしょうか。

また、無意識の偏見、アンコンシャス・バイアスについても勉強になりました。

今回は、早稲田大学のGSセンターの資料やリンク共有も多数していただき、ありがとうございました。拝見するとその先進的な取り組みのすばらしさ、ここまで取り組まれていることに感動しました。

すべての学生のハッピーのために、家政大も少しずつ取り入れていけると良いなあと感じました。

LGBTQ+ に対する知識を身につける大変良い機会になりました。本の紹介もありがとうございました。女子大にいることから、非常に多くの場面で「女性」を意識することは多かったのですが、私自身、さらにLGBTQ+に意識を向けるようになると思います。

森山先生がおっしゃるように、組織を大きく変えず、各部署でできることを担っていくのが非常に現実的だと感じます。主管を決める、各窓口情報を集約して提示する、ガイドラインを作成する、研修を行う、といったことは時間がかかるかもしれませんが、今すぐ「着手」はすべきだと思います。

お忙しい中、今回は貴重なお話を頂きまして、ありがとうございました。

以前からLGBTQ+に関して興味関心があり、卒業研究も子どものLGBTQ+に関する論文を作成したのですが、まだまだ知らないことがたくさんあり、大変勉強になりました。

お二人のお話をお聞きしながら、自分の何気ない発言によって、相手を傷つけてしまったりすることや自身の立ち振る舞いにもさらに注意していかなければならないと実感することが出来ました。子どもと育ち合い、見守っていく保育者という立場として、今後子どもたちを取り巻く環境に対してどのような配慮が必要であるか学んでいきたいと強く感じました。

日頃気になっていたLGBTQ+(性的マイノリティ)について、自ら知る機会を作つてこなかったため、今回の研修で学ぶことができ大変参考になりました。同時に、学生対応についても色々と考える機会となりました。

自分は偏見を持っているという前提を意識していくことの大切さを教えてください、はっとさせられました。もっと色々なお話を聞きたくなる講演でとてもよかったです。

今の時代このテーマは重要と思いましたが、正直同じ状況者であっても本人にしかわからない(本人であってもその日ごとの変化や相手次第で求めるものに差が出るのだと思います)

自分がこのテーマに限らず相談できる自分、また一緒に考えられる自分や環境を作りたいと痛感しました。

問題状況・現状・課題と理解することができ、考えることも多くありました。ありがとうございました。

前任校と前々任校で男性から女性に変わって入学してきた学生をサポートしました。一人は専門学校、一人は大学です。健康診断、実習などその学生が他の学生に知られないように、学業に支障をきたさないように教員間で連携しました。2人とも今は、看護師として活躍しています。講演の先生も言われていましたが、LGBTQ+の方でもそれぞれ違います。その方の困っていることにタイムリーに対応できればいいと思いました。

LGBTQ+の教職員が身近にいるのが当たり前という認識をより強く持つ必要があると感じた。一方で、見た目の問題等で驚いてしまうことがあるのも事実である。その事実を悲観することなく、新たな理解のチャンスと捉え、みんな違って当たり前、あなたがいるからおもしろい、そんな

インクルーシブな社会、学校を作っていきたいと思う。

大変わかりやすいお話でした。今回の講演を聞いて、LGBTQ+に関する自分の知識と意識が浅いことを自覚した。まずは紹介していただいた専門書などを読んでみたい。

知らないことが多かったと気付けるような機会は重要。森山先生、小西先生とも話がわかりやすかったことに加え、対談的なカタチにしたことで今までの講演にない入り込みやすさが生まれていた気がします。

今回の講演会は、基本的なことから実例まであげてくださり大変わかりやすく有意義な講演会でした。また機会があれば、勉強していき、知識をつけていきたいです。どうもありがとうございました。

今回の講演によってLGBTQ+の方に対する理解度をかなり深めることが出来たと感じました。今後も知識を深め、相手への気遣いに繋げていけるよう努力していきたいと思います。

SOGIに対して理解が深まった。女子大学で女子学生という一つの観念を避け、様々な場面で相手を気遣えるよう行動しようと思う。

LGBTQ+について、入門編的にわかりやすく、また当事者の方の事例も聴きたいへん貴重な内容だったと感じました。職員として、多様性を尊重した対応ができるよう、普段から心がけたいと思いました。

この講演会のような機会が無ければ、知れなかったこと、気づけなかったことがあったと思います。とても興味深いお話でした。

いままでのようにニュアンスのような軽い感じでは無く、言葉や具体的なものの知識をより深く学ぶべきであると感じました。

良く聞く言葉でも説明してと言われたらできない言葉が多くあったなと思いました。説明できないということはちゃんと理解できていないことなので、無意識のうちに差別的なことを言うことも無きにしも非ずだと思い、怖いと思いました。きちんと知識をつけなくてはいけないと改めて感じました。

今回の講演で、身近で起こりえる事であることが理解できた。デリケートな内容だが、講師の先生のアットホームな雰囲気が伝わり、決して専門家に任せるのではなく、自分

で出来ることから取り組んでいくのが良いことが理解できた。

性自認や性的指向についての知識や実際の課題について学ぶことができ、とても有意義な時間になりました。もっとLGBTQ+について学びたいという気持ちになりました。

意識より知識という言葉が印象的だった。世間で話題になっているからというだけではなく、どんな学生でも学生生活がしやすくなるように、理解を進め、どのような部署においてもサポートできる体制を整えていくことが大切なのだと学んだ。

Q6. 今後、当研究所で企画してほしい内容等がありましたら、教えてください。

ハラスメントを起こさない、起こさせない対応を人事課の研修などで学んでいます。実際に家政大学の教育系の学部でも多数の相談件数が報告されたと聞いています。絶対になくなることはありません。

心理的安全を皆が気遣うには、どのようなメッセージが効果的でしょうか。加害するものは、このような研修内容を薄いロジックとして理解するだけではないでしょうか。特に学生、若手教員の感性、メンタルケアについての講演を発信してほしいです。

リカレント、リスク教育について

毎回素晴らしいレクチャーをありがとうございます。今後にも期待しています！

医療的ケア児や重症心身障がい児に関する企画があれば、参加させていただきたいです。

大学として具体的な取り組み方がわかるように続けてほしいと思いました。

今回の発展版を開催してほしい。

本テーマの第2弾でもよいと思います。

ジェンダーの視点からキャリア（進路等）について考える企画をしてほしいです。

引き続き、社会的マイノリティの方の理解と支援をテーマにした企画をお願いしたいです。

たとえばダイバーシティに関する講演をする場合、講師の先生に加えて本学の教員、ダイバーシティを当事者として発言できる職員や学生にも登壇してもらい、対話形式で進行させることで学生からの質問や発言を誘発できるような「場」をつくる工夫があってもいいのではないのでしょうか？

大学職員としてのスキルアップにつながる、コミュニケーション能力など。

世界のジェンダー平等への取り組み（歴史と現状）

参加者同士が話し合えるワークショップ形式のイベント。

様々な分野の当事者の方の話を伺える機会があるとよい。

令和5年度 東京家政大学 女性未来研究所 活動報告書

2024年3月31日 発行

発行 東京家政大学 女性未来研究所

企画・編集 東京家政大学 女性未来研究所

表紙協力 東京家政大学 ヒューマンライフ支援センター

印刷・製本 上毛印刷株式会社

